

新東洋精神

新東洋精神

著者 大川 周明

大川周明

新東洋精神
大川周明著
東京 新東洋社

【解説】 一、「偉大なる精神のみよく偉大なる歴史的運動を指導する

ことができる」との信念に立つ大川博士は、「いま成立の過程にある大東亜秩序もまた偉大なる精神によって基礎づけられねばならぬ」として「新東洋精神」を提唱された。

この新東洋精神は、「大東亜諸民族を十分に鼓舞し興奮せしむるに足る東洋的世界観や東洋的叡智を含むことを必要とするがその内容を決定するためには数々の条件を必要とする」として、東洋西洋両文明の比較、東洋文明の本質、東洋伝統の精神わけても日本・中国・印度の伝統精神をそれぞれ深く究明されている。「参照―前掲書「大東亜秩序建設」(大

東亜圏の内容及範囲)・本全集第三巻「中国思想概説」「印度思想概説」

一、而して「東洋の複雑多様の奥にひそむ一如が既に千年にわたる生活体験によって日本精神として錬成されて来たのであります。日本ははやくから日本に支那・印度を併せて三国と呼び、日常の生活をこの三国意識の上に営んで来たのであります。したがって日本精神は即ち三国精神でありこの精神こそ大東亜秩序の基礎たるべき新東洋精神の根底または中心たるべきものである」との大信念を基礎づけておられる。

一、然しながらこの新東洋精神は、「完成した形を具へた一箇の思想体系として学者の書齋から世上に発表される性質のものではなく」「東洋再生のために身も魂も打込む復興亜細亜の行者の精神に孕まれその行動と共に成長して行くべきもの」であって、且つそれは「大東亜圏の政治的發展に役立つ」と同時に「東洋の再生を妨げる腐敗せる伝統を打破して社会的革新の遂行に役立つ社会性をも帯びたものでなければならぬ」ことを強調されている。

一、附文として収録した「アジア及びアジア人の道」は、「復興アジア論叢」(国際日本協会刊)に掲載されたもので、本書の論旨が簡明に述べられているので参考のために附した。

序

日本の思想の貧困は、屢々繰返されるところの嘆きであり、事実また貧困でもある。なるほど日本精神は高調されて居る。その主張者たちの中には、彼等の言論に共鳴せぬ者は非国民なるかの如く怒号する者もある。それにも拘らず知識層の多数は、密かなる反撥を以て彼等の大声叱呼を聴き流し、稀には婉曲なる表現によつて、恐る恐る否定的批判を下して居る。同胞をさへも動かし得ぬ言論が、亜細亞の心琴に触れる道理はない。亜細亞は切に思想を求めて居るけれど、不幸にして未だ之を与へられて居ない。

いま日本は、自ら慰め自ら安んずるためだけでなく、亜細亞を動かすための思想体系を生み出さねばならぬ。それは亜細亞諸民族を積極的に日本に協力させるための欠くべからざる条件である。但し思想体系は、生るべくして造らるべきものでない。多くの人々は、誰かが見事なる思想体系を書斎の中で完成し、之を街頭に売出してくれるのを待つて居るかに見える。併し乍ら斯かる期待は完全に誤りである。指導原理としての思想は、単なる知識と異なる。正確に観察され、論理的に組織された優れた理論でも、それが単なる知識に止まるならば、思想としては無力である。人間精神の活動領域に於ける思想は、最初より実践と不可離のものでなければならぬ。それは冷かなる理性によつてに非ず、実に燃ゆる行動精神によつて、最も生きたる現実たる政治の怒濤の中から創造せらるべきものである。

かくて思想は、それ自身のうち価値判断を内包し、確乎たる理想を具有し、且その理想を実現せんとする強烈なる実践的意欲を内燃せしめつつあるものでなければならぬ。人々は嘗に思想内容を承認するのみならず、その理想実現に対する旺盛なる実行意欲に魅せられ、進んで其の思想の信奉者となるのである。それ故に真個の思想は、必ず信念

と行動とを伴ふ。而して其の具体的表現は取りも直さず組織なるが故に、思想は常に団体を生む。如何なる思想も、それが非実践的即ち非組織的主張たるに止まる限り、知識であつても思想ではない。思想が、思想としての意義を発揮するためには、行動の組織即ち団体を必要とする。日本には多くの団体がある。但し其等の殆ど総てが、造られたる団体であつて生れたる団体でない。そは思想なき、従つて生命なき団体であり、その本質に於て烏合の衆である。有れども無きに等しき、又は無きにも劣る集合体である。

日本の生命は、驚くべく強靱にして豊富である。この生命又は精神は、国民の胸底に奥深く潜み、事あれば忠勇義烈の行動として現はれる。此の生命又は精神を思想的に把握すること、即ち意識の客観性を通して思想体系にまで定式化することが、日本の知的指導層に課せられたる重大なる任務である。而して其為には、日本の知識層が真個に東亞復興の熱意に燃え、此の理想に献身する意欲を旺ならしめねばならぬ。思想体系の樹立は、一の戦ひである。それは不斷の實踐によりてのみ、能く思想の豊富なる内容を全面的に顕現せしめ、遂に亜細亞を導くに足る思想体系にまで発達させ得るのである。かくして生るべき思想体系を仮に『新東洋精神』と呼ぶ。

此の小冊は、今春数回に互りて放送せるラジオ講演の草稿を加筆補訂せるものであり、新東洋精神の誕生のための準備の一つたらんことを期したるものである。

昭和十九年十月

大 川 周 明

『人類の一般戦争史は驚くべき統一性と合法性とを示して居る。薔薇色の面紗^{ヴェール}に覆はれたる人間の歴史的幼年時代の記憶の中から、半ば空想的ではあるが最初に明確に浮び出るものはトロヤ戦争の姿である。それは実に東洋と西洋、亜細亜と欧羅巴との最初の偉大なる衝突であつた。ヘロドトスは既にトロヤ戦争を是くの如きものと認めて、その歴史を此の戦争から書き始めた。また醇乎たる人間的詩歌の最初の天来の作なるイリヤスが、この戦争と関係があるのも決して偶然のことでない。トロヤ戦争こそは、東洋と西洋との宿命的なる戦争を中心として回転せる世界史の序幕であり、爾来その戦場は年と共に大きく広くなつて来た。それは今や極限に達して、地球全面を戦場とするに至り、スカマンデル荒野の代りに太平洋、煙るトロヤの代りに龐大なる支那とはなつたが、戦争は依然として互ひに相容れざる東西両洋のそれである。』

ウラヂミル・ソロヴィエフが、既に五十年前に明確に指摘せる如く、世界史の最も重要な内容をなせるものは実に東洋と西洋とであり、人類の文化は両者の対立・抗争・統一によつて進められて来たのであります。近世史の初頭に於て欧羅巴が、西に於ては亜米利加、東南に於ては印度、東北においてはシベリアを略取して以来、その勢力は急速に地球全面に延びたのであります。阿弗利加は悉く欧羅巴列強のために分割され、回教諸国はみな欧羅巴文明に包囲され且つ滲透されつつあります。僅かに日本及び支那を除く地球全面が、直接または間接に、欧羅巴支配の下に置かれたのであります。このことは欧羅巴をして、彼等の科学的文化と基督教的精神が、やがては世界を征服し去るべきものと確信せしめ、恰かも彼等は人類の歴史ありて以来、常に世界の主人公なりしかの如き自負を抱かしめるに至つたのであります。

然るに第二十世紀の初頭より、漸く亜細亞の覺醒が始まりました。既に前世紀の末葉において万国宗教会議がシカゴに開かれた時、列席の仏教徒及びバラモン教徒は、亜細亞一般の民意を代表して、下の如く歐羅巴人に宣言して居るのであります。曰く『諸君はその宗教を伝へる宣教師を我等に送りつつある。我等は諸君の宗教の価値を毛頭否定せんとするものでない。然るに我等が諸君と相知りてより二百年、その間我等は諸君の全生活が、諸君の奉ずる宗教が諸君に要求するところと、矛盾して居ることを、存分に見せ付けられた。諸君を導くところのものは、神が諸君に示せる真理と愛との精神にあらず、却つて一切の悪人の魂に潜む貪欲非道の精神に外ならぬことを見せ付けられた。それ故に諸君の宗教はその一切の内面的優越に拘らず、実行を不可能とするもの、随つてこれを教へる諸君にさへも無用なものであるか、然らずば諸君自身が、実行し得べくまた実行せねばならぬことを実行せんとせぬほどの悪人であるか、兩者の何れかでなければならぬ。その何れであるにもせよ、諸君は毫も我等より優るところなきが故に、願くは我等の安静を妨げざらんことを』と。消極的ではあるけれども極めて道理あるこの提言は、亜細亞を基督教文明の世界に包容せんとする歐羅巴の努力に対する東洋精神の抗議であつたのであります。即ち亜細亞は、先づ精神的に目覚めて、魂の自由を求め始めたのであります。

しかも政治的独立なくしては、遂に魂の自由もあり得ないのであります。国を失ふことは、魂の最後の抛りどころを失ふことであります。亡国の民となることは、人間が自己の精神によつて行動する自主独立の境涯から顛落して、ただ主人の意思のまにまに左右される奴隷となり果てることであります。それ故に国を亡されることは、人格的生活即ち道徳的生活の根柢を碎き去られることであります。これは堪へ難き屈辱であり、限りなき悲哀である。亜細亞の諸民族は欧米諸国によつて次々に斯の如き悲惨なる境涯に陥れられて行つたのであります。ビルマ独立運動の偉大な指導者オッタマ法師は、日本に於ける最も理解あり同情ある一庇護者から、排英運動から遠ざかりて仏道修行に専

念せよと勧められた時、下の如く答へたと伝へられて居るのであります。曰く、『貧乏人はダイヤの指環を指にしても寶物と思はれる。寶物でも名高い富豪が差して居れば人は本物と思ふ。仏教といふダイヤも、独立国のビルマなら人も信ずるが属国ではね』と。その表現は洒脱であるが、奥底に流れて居るものは真箇の宗教家が抱く深刻なる悲痛であります。

かくて亜細亞の志士仁人は、奪はれたる自由を回復してその同胞を恥づべき境涯から救ひ出すために、悲憤の涙を流し、犠牲の血を注いで来たのであります。併しながらそれ等のすべての努力も、磐石の如き欧米の統治機構の前には、竜車に向ふ蟻螂の斧にも等しかつたのであります。かくして欧羅巴は決して打勝ち難きものの如く思はれ、亜細亞の諸民族は卑屈になつたのであります。ヴレンティン・チロルは其著『印度不安』の中に、前世紀末葉に於ける印度の指導者層の心理について『彼等は往々にしてイギリス人を憎んだがしかも内心はこれを尊敬し且つ崇拜した。彼等はイギリス人が余りに傲慢なるを快しとしなかつたが、而もこれには当然の理由があると思つて居た』と書いて居りますが、是くの如きは独り印度のみならず亜細亞諸国の指導者層に共通な心理であつたのであります。

この弱者心理に深刻なる衝撃を与へ、絶えて久しき政治的希望を鼓吹し、一斉に亜細亞を興奮せしめたる革命のパン種は、実に日露戦争における日本の勝利であつたのであります。宿命的な東洋対西洋の抗争が、この時から再び世界史の主体となり始めたのであります。西はトルコ・ペルシアから、東は安南・ジャワに至るまで、自由と独立とを目標とする民族運動の波が、澎湃として起伏し始めたのであります。而してこの運動は長夜の睡りに堕ちて居た亜細亞の理性を呼び覺して、自由なる知識的活動を復活させたのであります。それは亜細亞の過去に対して新しき見方を教へ、既に醗酵力を失ひ尽せるかの如く思はれし古代文化の中に、新しき觀念の酵母を投じたのであります。斯くして東洋は、西洋の政治的羈絆と經濟的圧迫からだけでなく、自己の腐敗せる社会的伝統からも解放されて、古代の

新鮮に立還らんと身を藻掻き初めたのであります。此等の諸民族は、共同の政治的運動の下に置かれ、その情熱的な革命運動には、意識せられざる偉大なる統一目的があつたのであります。かようにして亞細亞復興は必至の勢ひとなりました。第一次世界戦は著しく此勢ひを助長し、大東亞戦争によつて、今や一躍実現の過程に入つたのであります。

今、大東亞戦争の進展と共に、世界史の新しい時代が刻々実現されつつあります。試みに二年以前の今日と二年以後の今日とを較べて見よ。この短かき期間に於ける大東亞圈の政治的变化は、正しく一個の奇蹟であります。米・英・蘭の勢力は悉く東亞の天地から駆逐され、絶えて久しき自由の旗が先づラングーンの空に、次いでマニラの空に翻り、やがてはデリーの空にも翻らんとして居ります。而して米英の桎梏から解放された国々の代表者が、相集まりて大東亞会議を開き、大東亞秩序の礎たるべき大東亞共同宣言の声明を見るに至つたことは、洵に世界史の一大飛躍であります。

然るに米英は、我等が解放せる民族を再び奴隷とするために、我等が独立を与へた国土を再び亡国とするために、今必死の反撃を試み、壮烈極まりなき戦闘が現に激しく戦はれて居るのであります。その激しき戦闘の間にも、新秩序の建設は着々進行し、ビルマ・フィリピンは独立国となり、インドネシア・マライは参政権を与へられ、タイ国の領土は調整され、わけても大東亞共栄圈の根幹たるべき中日両国の間には、両国不動の結合の基礎たるべき同盟条約が結ばれ、ここに大東亞圈の政治機構は一応その根柢を置かれるに至つたのであります。斯くて我等の渾身の努力はこの根柢の上に見事なる建物を築き上げることに集中されて居るのであります。吾々は、この建築を死物狂ひに妨げつつある米英と死活の戦ひに従事しながら、同時に比類なく見事なる建物を築き上げるために精進せねばならぬのであります。

大東亞秩序は雄渾無比なる政治的機構であります。然るに人間の創造する一切の制度または機構は、衷なる精神の具体的実現であり、その抱く理念の客観的実現であります。それ故に大東亞秩序も、またこれに相應する精神によつて基礎付けられねばなりません。大東亞共同宣言は大東亞秩序の目標を明かにしたものでありますが、これに生命を与へる精神は如何なるものであるべきか。言ふまでもなく偉大なる精神のみ、よく偉大なる歴史的運動を指導することが出来ます。いま成立の過程にある大東亞秩序も、また偉大なる精神によつて基礎付けられねばなりません。運動は今始まつたばかりであるから、この精神は今後不斷に新しき發展を遂げて行くべきであります。その根本的特徴だけは既に一定して居らなければなりません。この根本精神を、仮に私は新東洋精神と呼ぶのであります。それは大東亞諸民族を十分に鼓舞し興奮せしむるに足る東洋的世界觀や東洋的叡智を含むことを必要とするのであります。その内容を決定するためには数々の条件を必要とすると思ひます。

条件の第一は、東洋伝統の精神を知ることです。わけても日本・支那・印度の伝統精神を正しく認識することです。過去の東洋を以て全く現在に對して無意義なるもの、乃至は有害なるものとして排斥する傾向が、亞細亞の知識層の一部に存在して居るけれども、それは非常な誤謬であります。例へば、先年支那に於て孔孟の教は支那民族を毒するものとして全国の孔子廟を破壊し去らんとせる如き、その最も甚しきものであります。我等は過去の歴史から成長し来れるものであり、過去を離れて現在はないのであります。過去は否応なしに我等の現實の生命の内容となつて居るのであります。随つて眞実に過去を知ることが、取りも直さず、眞実に我等自身を知ることなのです。

それ故に有為なる民族の歴史に於ては、その偉大なる轉換期に際して民族の古代文化が燃ゆる情熱を以て回顧され新しき進歩的理想を古代精神の泉から酌み取るのを常とするのであります。第十五・十六世紀に於ける歐羅巴諸国の

ルネッサンス、幕末日本における国学の復興、ナチス・ドイツの古代ゲルマン精神の回顧、みな然りであります。それは決して反動的な復古運動ではなく、最も正しき自覚と反省とによる前進運動であります。何となれば、すべての有為なる民族の固有精神は、その古代国家創建時代に最も鮮明に、また最も旺盛に動いて居るからであります。日本精神が建国当初より飛鳥朝・奈良朝時代に互つて最も新鮮潑刺たる姿を現はして居ることは言ふまでもありません。支那精神及び印度精神も、また古代に於てその固有の特質を早くも作り上げて居るのであります。その中には現代の東亜のために新しく復活させねばならぬ多くのものを含んで居ります。それ故に我等は、新東洋精神確立のために、必ず先づ東洋伝統の精神を正しく認識しなければならぬのであります。

『亜細亜は一つ』とは、偉大なる先覚者岡倉天心の三十年以前の提唱であり、大東亜戦争の進行と共に、新たな感激を以て再認識せられつつある言葉であります。然るに日本の学者の中には、東洋または東洋精神の存在を否定するものがあります。即ち西洋に於てこそ一つの歴史が展開し、一つの文化が発展し、随つて一つの世界が形成されて居るが、東洋に於ては斯かる事実が存在しない。東洋に於ては西洋と同一の意味での東洋史なく、在るものは東洋民族個々の歴史たる日本史、支那史・印度史等々である。随つて東洋的と呼ぶべき世界または文化はないと主張するのであります。此等の人々は、亜細亜は政治的事情も多、産業様相も多、文化形態も多、亜細亜は決して一でなく、寧ろ余りに一でなさすぎる、と申して居ります。

併しながら、『亜細亜は一つ』と唱へる如何なる人も、未だ曾て表面に現はれたる亜細亜の複雑多様を否定する者はありません。現実の亜細亜の多様性は、眼にて見、耳にて聞き得る事実であります。随つて何人も亜細亜の差別を拒まうとはしません。ただその表面の千差万別の奥に潜む、東洋的なものの有無を尋ね求むる時、初めて異論が生ずるだけあります。

若し差別と対立とのみに眼を注ぐならば、今日の西洋は東洋よりも一層複雑多様であると言ひ得るのであります。例へば露西亞的なもの、独逸的なもの、仏蘭西的なもの、英吉利的なものの間には、差別特殊の相のみ多くして、殆んど共通なるものを認め難いのであります。それにも拘らず彼等はギリシヤの思想と、ローマの法律と、基督教の信仰とを多少の程度に於てその精神に摂取せるが故に、欧羅巴的と呼ばれて居るのであります。しかも近世に入りてより、欧羅巴の最も強力なる絆たりし羅馬法皇の全欧羅巴的支配が先づ宗教改革によつて崩壊し、次いで共通の宗教たりしキリスト教の信仰そのものが年と共に冷却し去つた上に、最近諸国が専ら各自の国民性の強化に努めて来たので、今日に於ては最早中世紀的意味に於ける西洋は存在せず、在るものはただ個々の民族国家だけであるとも言ひ得るのであります。

東洋に於ては、支那及び印度の思想・文化の交流によつて、早くも唐代には東洋文化の成立を見て居ります。次いで宋代に入りては、程朱の理学が生れ、恰かも基督教が中世欧羅巴の精神界に君臨せる如く、宋学が印度を除く東亜全域の精神界を支配したのであります。宋学は華嚴・禪・孔子・老子の諸教説、即ち印度及び支那の精神的主流が、宋儒の魂を培塿として渾融せられたる偉大なる思想体系であり、それ故にこそ普く東亜の指導原理となり得たのであります。日本に於ても程朱の教学が鎌倉時代このかた、長く精神界の王座を占め、徳川時代に於ては謂はゆる官学として、唯一の指導原理とされて居たのであります。日本が宋学の支配を脱却し始めたのは、伊藤仁斎や荻生徂徠などの思想家が、原始儒教への復帰を高調してからのことでもあります。

唯だ近世に入りてより、亜細亞諸国の大半が、欧羅巴の植民地または半植民地となるに及んで、東洋の文化は蹂躪され、歴史は無視され、諸国は個々に分烈対立の状態に置かれたのであります。この分烈は必然亜細亞諸国の相互の理解と認識を妨げたのであります。各国はただ自国のことのみを念頭に置いてまた他国を顧みようとしませんでし

た。亜細亞諸国の知識層は、新鮮なる情熱を以て欧米を知らうとしたが、亜細亞の国々に対しては殆んど関心を持たなかつたのであります。彼等は英語を学び、仏蘭西語を学び、独逸語を学んだけれど、自分の国語以外のただ一つの東洋の言葉をも、熱心に学ぼうとはしなかつたのであります。

固より東洋は亜細亞諸国のことについて全く無知識であつたのではないのでありますが、ただその知識は、殆んど欧米人の著書を通して得たものであつたのであります。然るに欧米人が正しく東洋を理解することは、たとへ誠実に努力しても、なお且つ至難のことです。況んや多かれ少かれ外交官の謀略や、文学者の輕率な想像や、宣教師の宗教的偏見などが加味されるとすれば、彼等によつて描き出される東洋の姿は、甚しく歪められたものとならざるを得ないのであります。而して不幸にも斯の如き著書が、東洋諸国の相互の認識のための殆んど唯一の媒介であつたのであります。欧米は亜細亞を輕蔑する。それ故に彼等の著書を読む亜細亞人は、亜細亞に何の善きものも無いと思ふやうになるのであります。欧米は亜細亞の覺醒を欲しない。それ故に東洋民族は、健全なる古代を回想し國民的英雄を追憶することを妨げられるのであります。欧米は東洋の團結・統一を惧れる。それ故に東洋共通の文化と理想とを想起することを妨げられるのであります。この分裂し対立する亜細亞の現實に圧倒されて、東洋否定論者は亜細亞の一如を否認するのでありますが、吾々は是くの如き分裂狀態そのものが、實に欧米によつて作り出されたものであることを銘記せねばなりません。

加ふるに人は林中にありて林を見ることは出来ませぬ。林中にありて眼に映るものは、一本々々の樹木だけであります。同様に東洋の中にありて東洋を見れば、東洋は目に入りませぬ。そこに在るものは日本であり支那であり印度であります。しかし一度林を出て遠く望めば、林が一定の林相を有する如く、西洋よりこれを望めば、自ら一個の東洋が存在するのであります。それ故に亜細亞に東洋否定論者が居るに拘らず欧羅巴には東洋否定論者が居りませぬ。

歐羅巴は或は憧憬の対象として、或は輕蔑の対象として、或は恐怖の対象として、或は掠奪征服の対象として、現に一個の東洋を認めて居ります。而して事実東洋は存在し、随つて東洋精神も東洋文化も存在するのであります。然らば西洋と対立する東洋的なるものの本質は何か。

二

いま吾々が大東亞圏と呼ぶ地域は、季節風の影響下にある亞細亞の湿润地帯で、北は日本列島・朝鮮半島・南滿洲・支那から、東南亞細亞を経て、南は印度・セイロンに至るまでの、太平洋及び印度洋に面する地域を含んで居るのであります。この地域は、太平洋及び印度洋から吹き上げる多量に湿氣を含んだ風の影響によつて、氣候は温暖湿润であります。またその多量に水分を含む風が、東北から西南に連つて亞細亞大陸を東西に両断する蜿蜒万里の山脈に當つて、沛然たる雨となります。その雨がインダス河・メコン河・揚子江・黄河等々の長江大河となつて、印度洋及び太平洋に流れ下つて居ります。而して此等の河川に灌溉される沃野が遠く開けて居るので、最も農耕に適して居ります。現に亞細亞の農民の九割が、この湿润地帯に住んで居ります。

人類はその居住する地域の基本的なる地理的条件、即ち地形的竝に景觀的条件によつて、その活動範圍を規定されまたその生活様式を支配されるのであります。今これをその生活様式について見ますれば、湿润地帯に住むものは農耕民族となり、乾燥地帯では遊牧民族となり、兩者の中間に位する亜湿润地帯では狩獵民族となるを常として居ります。而して大東亞圏は亞細亞の湿润地帯である故に、ここに居住したものは自ら農耕民族となつたのであります。その中軸をなせるものは、北に於ては支那、南に於ては印度であり、文化的には支那文化圏・印度文化圏・印度支那文化圏として發展して來たのであります。

農民の生活は固定して動かない土地に依存して居ります。それは同一の場所に定住し、同一環境に囲まれて居ります。播種期及び收穫期には多くの人手が必要なので、生活の単位は個人ではなくて家族であります。土地と環境とが不動である限りは、農耕の方法も先祖代々同一の様式で事足るのであります。その上に農民は常に自然の支配を受けるのであります。土地の豊凶は人間の力では如何ともし難い天候に左右されます。百日の辛苦も水害・旱害のために一朝にして空しくなります。かやうにして農民は家族主義者となり、保守主義者となり、運命論者となるのであります。農民にとつて自然は、これに反抗するには余りに偉大であります。彼等はこれに反抗し、これを征服しようとはせず、これに順応しようとするのであります。

農民の斯かる生活態度に対して最も著しき対照をなすものは、獵師のそれです。獵師は動かない土地に動かない植物を育てるのではなく、速かに走る動物を追ひ廻して生活するのであります。時として彼等は密林や曠野の中を数日・数十日も彷徨せねばならず、酷暑嚴寒を冒して馳駆せねばならぬので、体力虚弱なる老人や幼児は、足手纏ひとなるにすぎませぬ。多くの肉食動物が単独生活を営み、草食動物が群居生活を営むやうに、農民が集團生活を営むのに対して獵師は孤獨的に行動するのであります。その同伴者と言へば体力が略々相等しい異性だけであります。また彼等の対象たる動物の中には、走り逃げる代りに彼等に襲ひかかる猛獣も居ります。彼等はこれと死活の闘争をしなければなりません。また動物の習性を正しく認識し、武器を改良し、またその使用に長ずることが、直ちに収獲に影響します。随つて農民よりも知力を働かすことが多いのであります。かやうにして彼等は個人主義者となり、進歩主義者となり、戦闘主義者となり、主知主義者となるのであります。是くの是き狩獵民族の最も代表的なるものは北歐に居住せるアリアン人です。東洋及び西洋は斯の如き基礎の上にそれぞれ歴史的発展を遂げて来たのであります。

然るに近世に入つてから、この農耕的東洋に狩獵的西欧が進出して來たのであります。而してその旺盛なる戰闘的精神と、精密なる科学的知識と、精銳なる武器とによつて、容易に征服の歩みを大東亞圈内に進め、印度・印度支那・東印度諸島を完全に彼等の領土とし、その他の諸國をも半植民地の状態に陥れたのであります。而して彼等は、此等の諸地域に於て、その征服の主目的たる經濟的搾取を強行するために、勢ひ東亞諸民族の生活を歐羅巴的に改造する必要を認めたのであります。然るに東亞諸民族の生活は、その家族制度、その信仰、その理想、その道義と不可分のものでありますから、彼等の政治的支配は同時に亞細亞一切の文化を破壊し去らんとするものであります。若し東亞に日本がなかつたならば、歐羅巴文化が既に全亞細亞を支配して居たことと存じます。

かようにして東洋は、亞細亞濕潤地帯に國をなしたのでありますから、その經濟的・社会的・文化的方面に於て幾多の共通点を有し、随つて其の世界觀に於ても明かに根本的特徴を有して居ります。茲に世界觀といふのは、如何に世界と人生とを觀るか、如何にこれを理解し解決するか、これに應じて如何に生活を形成するかを定める窮極の意識的根柢を意味するのであります。

さて歐羅巴精神と東洋精神との最も顯著な對蹠的特徴として常に指摘されることは、西洋は主我的であり、東洋は没我的であることであります。即ち西洋に於ては個々の人間の人格的価値が優位を与へられ、東洋に於ては超個人的共同体が優位を与へられることであります。それ故に歐羅巴に於ては、個々の人間の能力、そのあらゆる性質を存分に發揮させることが教育の目標であり、随つてその社会的・政治的目的を支配して居ります。個々の人間が、自己の生活について自ら決断し、自主的に自己の途を進むための人格的判断力及び人格的責任感を持つやうにすることが、歐羅巴の追究する性格の陶冶最高目標であり、随つて明白に個人主義であります。然るに東洋に於ては、個人は彼等を囲む社会的環境の中に没入し、個人の利害は家族・血族・民族という超個人的秩序の中に編み込まれて居ります。

例へば儒教に於ては、人間は孤立せる単独の個人として考へられず、常に君臣・父子・夫婦・長幼・朋友の關係に於て把握されて居ります。人間は君主の臣下であり、両親の子であり、妻の夫であり、長者の年少者であり、誰かの友人であり、随つてそれぞれの關係を正しくすること、即ち五倫の道を全うすることによつて、初めて人間たり得るとするのであります。それ故に道德とは取りも直さず人倫の道であります。人間の單位は個人ではなくして家族であります。国家は家族の拡大であり、家族の正しい秩序が、眞実なる国家制度の前提となつて居るのであります。かやうにして歐羅巴の社會が個人的契約の上に成立して居るのに対して、東洋の社會は家族的團結によつて成立して居るのであります。

此の東洋の超個人的秩序は、宇宙全体を貫くものとされて居ります。東洋に於ては万物の宇宙的秩序と人間の社會的秩序の間に、如何なる分裂をも認めて居りませぬ。東洋は天地人即ち神と自然と人生とを、直覺または體驗によつて、生命ある統一體として把握して來たので、西洋に於ける如く宗教と道德と政治との分化を見なかつたのであります。日本のみち、支那の道、印度のダルマ又はリタ、回教のシャルは、みな人間の生活を宗教・道德・政治の三方面に分化せしめず、飽くまでそれを渾然たる一體として把握し、これ等の三者を兼ね具へた人生全体の規範とされて來たのであります。例へば支那の道とは天地人の道であります。一層詳しく言へば、天と地とに対して正しい關係を實現する道であります。而して天に対する關係を正しくする道とは、取りも直さず宗教であり、地即ち自然に対する正しい關係を實現することは、狹義の道德であり、人に対する道即ち人間同士の正しい關係を實現することは、政治であります。人間は同時にこれ等の三方面に対する關係を正しく實現せねばならぬとされるのであります。政治の道義化といふやうなことは、政治と道德とを別個の分野と考へて來た西洋に於てこそ意味があるけれども、東洋に於ては元々両者は不可分のものでありますから、改めて政治の倫理化を説くには及ばないのであります。これは印度教及び

回教に於ても同様であります。恰かも儒教が支那人の宗教・道德・政治の全面に互る規範を与へると同様に、印度教や回教も、また印度人や回教徒の全生活を律するものであります。それはキリスト教の如く専ら人間の宗教的信仰に關する教ではなく、信仰は言ふまでもなく、日常生活の全部に互る規範であります。

さて宇宙を生命ある統一体として把握する東洋精神は、神と人とを峻別し自然を生命なきものとして存在論に哲学の主力を注ぐ西洋の主張と、著しい対照を示して居ります。東洋は、神的なるものと人間的なるもの、個人の生命と宇宙の生命、本体と現象、過去と現在、此岸と彼岸との間に、本質的な対立または差異を認めないのであります。色即是空・空即是色・色不異空・空不異色であります。このことは歐羅巴人からは非論理的・非合理的と思はれて居りますが、それは東洋の一元論的・汎神論的世界観から流れ出る生命感情の自然の発露であります。それは西洋の分別的・特殊化的なる精神と明かなる対象をなすものであります。典型的なる歐羅巴精神は、抽象し、分析し、その注意を個々のもの及び異なるものに向け、然る後に個別的研究の結果を分類し、これを論理的体系に組織するのであります。東洋に於ける対立と差異とを認めながらも、一切の存在は其の至深の奥底に於て相結んで居り、且つ宇宙を以て一切を支配する力によつて生命を与へられて居る統一体として觀察し、これを合理的方法によらず、経験によつて内面的に把握せんとするのであります。西洋は宇宙に於ける諸々の力の対立や矛盾に力点を置き、個々別々の具体的な姿を深く掘り下げようとするのに対し、東洋は諸々の力の均衡と調和とを尊重するのであります。

ニュートンが、林檎の実が上から落下するのを見て、引力の法則を発見したことは名高い話であります。林檎の実の落下といふことには、実に無限の意味が含まれて居ります。樹木が芽生え、成長し、花が開き、実が結び、それが成熟して地に落ちるのであります。これには天地のあらゆる力が加はつて居ります。日光と雨がこれを育て、風や害虫がこれを脅します。然るにニュートンは、その他の一切の意味を見ないで、ただ物体の運動として、即ち一の

個体が他の個体への運動としてのみ、林檎の落下といふ事実を見て居るのであります。即ち林檎の落下の事実から、運動以外の一切の意味を捨象したのであります。これは洵に徹底せる捨象であり、分離であります。而してこの徹底せる分離作用または捨象作用によつて、引力の法則を発見したのであります。是くの如き物の見方は、東洋に於ては稀有のことであります。東洋に於ては一葉落ちて天下の秋を知るといふやうに、一枚の葉の落ちるのを見ても、これを天下または宇宙と關聯せる事実として見たがるのであります。マハーバータの一説話には、マンゴーの実が枝から落ちるのを見て、諸行無常を感じて出家した国王のことを述べて居ります。これはニュートンの見方とは凡そ異つた見方であります。それは果実の落下を宇宙全体と關聯させ、自己を宇宙と結合して、個体の存在を宇宙に順応せしめるのであります。それは分離とは全く對蹠的な綜合的直観であり、東洋精神の著しき特徴の一つであります。

三

次に東洋は極めて古い時代に於て、夙くも一応完成した文化を創り上げて居ります。支那では既に三千年以前に、孔子が『郁郁乎として文なるかな』と讚美した周の文化が出来上り、二千年以前に全支那を統一せる偉大なる国家の出現を見て居ります。印度でも既に二千五百年以前に於て、その後長く印度を支配して今日にまで及んで居る印度文化の基礎が置かれ、印度最初の統一者である孔雀王朝治下の印度帝国は、その整然たる行政機構、その強大なる軍備首府の規模雄大、乃至その政治指導原理の優秀なりし諸点に於て、同時代の東西の如何なる国家にも其比を見ないほど見事なものであつたのであります。

かやうに東洋は、周囲の諸民族がなほ未だ野蛮未開の状態にあつた時に、夙くも燦然たる文化の華を咲かせたので

自分の国の文化を以て一切の他国の文化よりも遙かに立勝れるものと考へ、只管古代からの伝統を護ることに力を注ぎ、欧羅巴に見る如き進歩に対する欲求を感じなかつたのであります。欧羅巴の文化は不断に新しき形式を求める不安なる青年の姿を宿して居り、常に新しいものを以て古いものを克服して行かうといふ改造の衝動から生れるのであります。然るに東洋は、既に実現された昔ながらの文化に最高の価値を与へ、古への黄金時代に咲き揃へる美しき花が、彼等から見れば低劣な異民族の文化によつて汚されぬやうにと苦心して来たのであります。支那でも印度でも、周辺の異民族は文化の程度は低かつたけれども、慄悍にして好戦勇武なる民であつたので、彼等は常にこの野蛮にして勇敢なる異民族の脅威を受け、その侵略に悩まされたので、之に対して自国の文化を飽くまでも守り通さうといふ精神が愈々強くなつたのであります。例へば支那では孔子が既に『述べて作らず』と申して居ります。即ち孔子の生涯の仕事は、周の制度文物を復興することにあつたのであります。即ち混沌乱離の支那を、周の黄金時代に立還らせらるにあつたのであります。而して漢代以来、孔孟の教が支那の国教となつて、清朝時代にまで及んだのでありますから、古へを尚ぶ孔孟の精神が、二千年に亘つて支那を支配して来たのであります。印度に於ては、仏陀が出現して、古代から印度を支配して来たバラモン精神に反抗し、新しい宗教を唱へたのであります。やがて古い精神が復興して仏教を印度から駆逐し昔ながらのバラモン精神が再び印度を支配して今日に及んで居るのであります。それ故に西洋の進歩主義に対して、東洋は明白に保守主義であります。

かやうにして東洋は、祖先の遺風、祖先の信仰、祖先の精神を昔ながらに承け継いで、これを子々孫々に伝へて行くことを、最も神聖なる義務と考へるのであります。東洋の極端な保守主義者は、人間及び人間の社会組織は、進歩するか退歩するか、発達するか堕落するか、決して同一状態ではあり得ないこと、また時勢の推移は如何なるものをも変化させずに置かないことを、強ひて考へてまいとして居ります。そこで万代不易といふことが、東洋の最も有力

なる生活理想となるのであります。勿論、欧羅巴にも保守主義者は居ります。併しながら彼等は、少くとも社会進化の法則だけは承認します。彼等と進歩主義者との争ひは、ただ如何なる速度を以て、如何なる方向に進むかといふ点に存するものであります。即ち進むことには異存がないが、進み方が速すぎるとか、或はその方向に進んではならなまいといふことが議論となるのであります。東洋の保守的精神はこれと趣を異にして居ります。それは時間の流れを超越して万古不動を固執するのであります。恰かも船に乗つて居る人が、固く両眼を閉じて兩岸を見ないで、船進まず水流れずと思ふのに似通つて居ります。

この東洋の保守主義は、言ふまでもなく利害相伴つて居ります。その長所を挙げれば、この保守的精神あればこそ、東洋は過去に於けるすべての価値あるものを守り続け、一貫して中断せざる文化の系統を相続して来ることが出来たのであります。東洋の精神的鍛錬は、今なお昔と異ることなく、その把握せる根本的真理は、今日まで伝統不断であります。例へばその最も手近かな実例を、吾々日本人の意識について見ることが出来ます。吾々は万葉集の歌を読み、能狂言を見て、現に吾々の文学的要求・芸術的要求に満足を与へられて居ります。千年以前の歌、数百年以前の舞が、そつくりそのままの姿で、恰かも昨日詠まれた歌のやうに、また今日舞ひ始められた舞のやうに味はひ樂しまれるといふことは、ただ東洋意識のみが能くするところで欧羅巴に於ては決して其例を見ざるところであります。保守的精神は一面に於て、かやうな長所があると同時に、他面に於ては大なる短所を具へて居ります。即ち此の保守的精神は、既に無用に歸したる過去の塵埃を民族の行手に積み上げて、その潑刺たる發展を阻むのであります。曾ては価値があつたけれども今は無意味となり果てたもの、また本来の精神を失ひ尽して無用の形式となり果てたものまでが、不思議なる執著を以て固執され、そのために民族的生命の流れを阻み、社会をして泥沼の如くならしめるのであります。かやうな保守的精神が東洋の社会的停滞を招き、印度や支那の衰微の一因となつたことは拒み難き事実

と存じます。

さて東洋伝統の精神は、その社会観に於ては個人を超個人的秩序の中に没入する共同体原理、即ち全体主義に立脚して居ります。その超個人的秩序には範囲の広狭があり、或は家族が全体である場合もあり、或は郷土が全体である場合もあり、乃至日本の如く国家が全体である場合もありますが、卑に角その全体の中に於ては、相互扶助というところが重んぜられ、一村は一家族の如く、一郷も一家族の如く、一国もまた一家族の如くあるべきだと考へられて居ります。此の点に於て個人を先にし全体を後にして個人的幸福を目標とする西洋の営利的社会原理と異つて居ります。

しかも東洋社会に於ては、親子・兄弟・長幼の序が家族の中に存する如く、差別または階級が社会に存することを当然と考へて居ります。すべての人間は平等だとは考へないのであります。随つて西洋の民主主義とは違ひ、権威の前に喜んで服従し、その上下一致は権威の下に於てのみ実現されるものとして居ります。而してこの権威は常に峻厳なる道義性を要求され、政治の根本目標は道義の実現であり、権力はその手段と考へられて来たのであります。

また東洋は、既に申上げたように、天地人を一体のものと観じ、偉大なる生命によつて貫かれて居る統一体として宇宙を觀するのであります。日本では、人間は言ふまでもなく、国土山川草木悉く伊邪那岐・伊邪那美二柱の神様が御生みになつたものと古事記に記されて居ります。人間でも草木でも、その奥底には天地を貫く偉大なる生命、即ち神を宿して居るのでありますから、存分にその本質を發揮すれば、みな神または神の如きものとなるのであります。それ故に日本でも支那でも印度でも、人間や草木が見事にその本質を發揮すれば、悉くこれを神として祀るのであります。いま日本では日本人としての面目を激しい戦場に發揮して、潔く死に行く人が沢山あるのであります。これ等の勇士はみな靖国神社に神として祀られ、畏くも、陛下の御親拝をさへ受けるのであります。欧羅巴ではこれを東洋の多神教などと言つて居りますが、基督教や回教の如き一神教、宇宙を超越した独一の神を信仰する宗教が、發展

の最高の段階に達した宗教であるとするのは、西洋人の独断であります。東洋に於ては宇宙を超越した神を認めないのであります。神は天地人の一切の中に宿つて居るのでありますから、多神どころか総てのものが悉く神たらんことを望むのであります。一天四海皆帰妙法・草木国土悉皆成仏が東洋の理想であります。

人間にとつて一番大切なことは、自分の本質を存分に發揮して神となること、即ち成仏することでありましたが、そのためには修行を必要とします。部分々々を知るためには、耳で聞き眼で見ればよいのでありますが、宇宙の統一を体得するためには、修養が必要となります。音楽でも書画でも、これを存分に鑑賞するためには素養が要るのであります。唯だの耳でなく聞き分ける耳、唯だの眼でなく見分ける眼を持たぬものには、微妙なる音楽も蛙鳴蟬噪と交りなく、弘法大師の名筆もペンキ屋の書く看板の字と扱はぬこととなります。それ故に宇宙を全体として把握し、自己の生活をこれに順応させるためには、修行が必要となります。随つて東洋の謂はゆる學問は、専ら修行のためであり知識は実践のための道具であり、理論と實際との遊離を許さなかつたのであります。それ故に道德的なものが常に合理的なものに対して優位を与へられて居ります。支那では芸術をも道德を以て律し、美を以て道德の一表現たらしめようとするのでありますから、芸術の理想は『美を尽しまた善を尽す』といふことにあるとされて来たのであります。

かやうにして西洋では、主として自己を世界から分離し、その眼を客觀の世界に向け、自己の外部即ち周囲の世界を理解して、これを自己に服従させようとするのに対して、東洋は自己の内部を吟味し、自己の中に世界を捉へ、自己を世界の一部として觀じ且つ生きようとするのであります。全体としての宇宙は、小さい人間の對象としては余りに大であります。それ故に分離的な西洋精神は、先づ世界から自分を分離し、その世界を更に動物界・植物界・鉱物界等々に分離し、更に其等を幾多の小さい世界に切り刻んで、それを手掛りに世界に働き掛け、これを自己のため

に役立たせようとするのであります。イギリスの印度統治は *Divide and rule* 即ち離間して統治すると言はれて居りますが、西洋人は印度どころか宇宙全体をも、自分の役に立たせるために分割に分割を重ねて行くのであります。歐羅巴の科学は斯の如き西洋精神、即ち全体としての宇宙に同化しようとせず、宇宙の一部分に手掛りを作つて、これを自己のために用ひようとする強烈にして執拗なる行動欲から生れたものと存じます。

四

これまで申上げたやうに、東洋精神は明かに根本的特徴を有し、その特徴はこれを西洋精神と対照する時に最も明瞭となるのであります。吾々は一面に於て此の同一性を認めると同時に、他面に於て諸民族精神の差別相をも無視してはならないのであります。例へば支那と印度とは、亜細亜湿润地帯に国をなせる農耕民族として、経済的・社会的・文化的方面に幾多の共通点を有して居りながら、他面著しく地方的色彩を濃厚にして居ります。このことは遊牧民族や狩猟民族が、殆んど地域を超越してその民族精神乃至民族文化が甚しく似通つて居るのと、著しき対照をなして居ります。その理由は、遊牧民族や狩猟民族が絶えず移動して其の居住地を變へるのに対して、農耕民族はその居住する土地と密接不可離の關係を有し、氣候風土などの自然的影響を蒙ることが、深刻甚大なるためであります。随つてその文化が高度に発達すればするほど、それほど地方的特色が顯著となるのであります。支那や印度が幾度か異民族の侵略・征服を受けながらも、結局これを自己に同化して、それぞれ特色ある支那精神及び印度精神を発達させて来たのは、そのためであると存じます。

東亞復興のための根本的な条件の一つは、東亞諸民族が其の古代文化の純粹性を各自の内部に生きたるものとして復活させることであります。而して今生れ出ねばならぬ新東亞精神の最も重要な構成要素となるべきものは支那精

神及び印度精神であります。それ故に吾々は先づ支那的なもの及び印度的なものの再探究を行はねばならぬと存じます。

支那では辛亥革命後極端なる旧文明の否定・破壊が行はれ、青年男女は孔孟の教を蹂躪することが進歩的であるかの如く考へ、甚しく乱暴な生活を営んで居たのでありますが、實際的には陰鬱と懷疑と墮落とが、支那の精神界を覆うてゐたのであります。然るに支那事變の數年前から、支那本来の精神に還れといふ声が隨處に唱へられ始め、例へば昭和九年には国民政府が孔子祭を復活し、翌昭和十年には陶希聖以下十人の大学教授の中国本位文化建設宣言が發表され、次いで山西省・湖南省及び支那革命の発祥地たる広東省に支那の古典、殊に論語・孟子・大學・中庸、即ち四書を読めと奨励する読経運動が起り、昭和九年二月から始められた蔣介石の新生活運動も、儒教精神を根柢とせる上に、管子が富国強兵の必要なる手段として高調した礼義廉恥を極力鼓吹して居ります。それ故に支那に於ても真面目に古代回顧が始められて居るのであります。

支那民族の固有精神が確立したのは今から三千年以前から二千二百年以前に至る八百年、即ち殷の末期から周の末期に至る時代であります。支那に於ける最初の確實なる王朝は殷であります。それは東方より興つて西に進み、今日の河南省を中心とする黄河流域の黄土地帯に定著して国家を建設したものだと思はれます。その殷が、今日の陝西省の渭川流域に興つて東に進出して来た周のために亡ぼされ、茲に西周時代となるのでありますが、周は殷の文化を繼承すると共に、これを改革し發展させて支那的なものを創り上げたのであります。周が衰へて春秋時代となり、次いで戦国時代となり、政治的混乱・社会的變化が激しく行はれたに拘らず、支那民族の創造力は極めて潑刺旺盛であり、春秋末期には早くも支那古代精神の二大源流である孔孟思想及び老莊思想の対立を見、戦国時代には謂はゆる諸子百家が現はれ、世界思想史上に於けるあらゆる思想や學說が唱へられて居ります。光彩陸離たる支那の古典は、殆

んど悉くこの時代に出来たものであり、正しく支那精神史上の黄金時代であります。

其等の百花繚乱たる思想のうち、孔孟精神が長く支那の精神界を支配し、支那文化は即ち儒教文化とも言ひ得るのであります。老莊の哲学は極めて深遠であり、無為自然の思想は、強く支那人の心情に慙へるものがありますが、それは社会道德・国家精神の原理となり得ない点があります。それ故に修身・齐家・治国・平天下の道を説く孔孟の思想が、支那政治の指導原理となつたのは当然であると存じます。世の中には、老莊こそ支那民族の本来の精神を現はしたもので、儒教は権力を有てる少数の貴族群即ち士大夫層の階級的イデオロギーにすぎないと主張する人々があります。成ほど儒教の内容を成して居るものは、大部分は殷代以来の貴族階級の伝統思想であります。併しながら少数の賢明なる士大夫の学問は、一般民衆の単なる常識に較べて、遥かに本質的に民族的なものを代表して居ります。のみならず儒教は、単に士大夫層の伝統思想だけでなく、殷代以来の民間の思想や信仰も抱擁して居るので、民衆の意欲も十分に儒教の政治学の中に取り入れられて居ります。それ故に吾々は儒教を通して現はれたる支那精神の本質を掴み、これを現代に復活させねばならぬと存じます。

支那民族は不可解の民族と言はれてをります。支那に滞在して長い年月を経れば経るほど、支那人の正体は益々分らなくなるといふ歎声は、吾々の屢々耳にするところであります。さうかと思へば或人は簡単不遠慮に、支那人は孔孟の教へるところと全く反対に行動するものと思へば間違ひないと断言して居ります。成ほど、支那人の色と慾とのほかに何ものもないやうな一面を見れば、天下に彼等よりも俗なるものはないやうにも思はれます。さうかと思へば超然として世間を忘れ、自分だけの天地に悠々と逍遙している有様は、日本の仙人などよりも遥かに仙骨を帯びて居ります。日本人の物差で支那人の言ふこと為すことを見れば、これほど不都合な民族は少からうと存じます。併しながら一つ一つの言葉や行動を経験的に観察するならば、分らないのは決して支那人ばかりでなく、吾々の同胞もまた

甚だ不可解であります。吾々の同胞と言はず、実は吾々自身さへも不可解で、昔から我れと我身が分らないと申して居る位であります。自分のことを仔細に反省して見ましても、或時は君子の如く、或時は小人の如くであります。それ故に支那人に対して、彼等は仁義忠孝を口にするが、その行ふところは全くその反対などと申して、ただ彼等の短所欠点だけを挙げて、したり顔することは、慎まねばならぬと存じます。例へば支那人を動かすのには、金か拳固か、この二つのほかに途がないとよく言はれて居りますが、これは遺憾ながら直ちに吾々の同胞にも加へらるべき非難で、黄金にも誘惑されず権力にも屈服しない毅然たる大丈夫は、日本人の間にも沢山は居らぬやうに思はれます。かやうな次第で吾々は個々の言行に現はれたところだけを見て、支那人の本質を掴まうとしてはなりません。独り支那民族と言はず、一切の国民または個人の本質は、その魂の奥深く流れる精神、その最も尊ぶところのもの、その最高の価値を置くところのもの、一言で申せばその志すところ、即ちその理想とするところを明かにして、然る後に初めて正しく把握し得ると信じます。

さて支那民族の理想、随つてその本質を知るためには、経史の研究が何よりも必要となつて来るのであります。経書即ち儒教の教典に説かれて居る教は、支那の国民哲学として、長く支那人の公私一切の生活の規範となつて来たものであり、これを研究することによつて、吾々は宗教・道德・政治に関する支那の正統思想、その至深の要求、その最高の理想を知ることが出来ます。支那の史書は経学精神によつて歴史的出来事を批判したもので、支那が如何にして治まり如何にして乱れ、その治乱興亡の間に、如何に支那民族性が具体的に發展して来たかを教へるものであります。

吾々はかやうな意味で支那古典の再探求が、今日の日本にとりて極めて必要なことを痛感するものであります。これは学者の一生の仕事でありますが、要領を掴むことはさまで困難ではないと存じます。例へば儒者は明体達用と

いふことを申します。明体は読んで字の如く本体または本質を明かにすることであり、達用は用を達すること、即ちその実践的方面を指すのであります。然るに儒教の明体、即ち理論的一面は中庸一卷に尽されて居り、達用即ち実践的一面は大学一卷に要約されて居ると言ふことが出来ます。両書とも極めて簡単なものでありますが、この二冊を読んだだけでも、儒教の根本精神は把握出来ると存じます。しかも其の根本精神は、大学の劈頭にある一節、即ち『大学の道は明德を明かにするにあり。民を新にするにあり。至善に止まるに在り』といふ名高い一節の中に説き尽されて居ります。

至善とは言ふまでもなく人生最高の理想であります。明德を明かにするとは、人間の道德的本質を鮮明に發揮することであります。また民を新にするの民は、社会的生活を営んで居る人々の全体、即ち共同生活体のことでありますから、民を新にするといふことは、鮮明に發揮された道念に則つて、不斷に社会を改善し革新して行くことであります。即ち此の二つの条件を全うすることによつてのみ、至善が実現されるというのであります。これは人間を『個人的にして同時に社会的な実体』として考へ、人間の本质は一面個人の魂の中に内面的に深められて行くと同時に、他面社会の表に客観的に拡大され組織されて行かねばならぬことを教へたもので、洵に正しき認識であると存じます。

それ故に儒教の根本精神によれば、道德を離れて政治はないのであります。治国といふことは明德を国家に明かにすること、言ひ換へれば、主観的に体得された善を、客観的に国家といふ組織に実現することであります。同様に平天下といふことは、明德を天下に明かにすること即ち世界全体に道義的秩序を与へることであります。それ故に『天子より庶人に至るまで一にこれ皆身を修むることを以て本と為す』と言はれるのであります。『身』といふのは人格のことであります。随つて修身とは個人的であり同時に社会的である人間の本质を長養し、鍛錬するといふことです。

かやうにして儒教に於ては、西洋の如く道德と政治を分離して居りません。或人が荀子に向つて何うすれば国が治まるかと尋ねた時に、荀子は之に答へて『身を修むるを聞く、未だ嘗て国を為むるを聞かず』と答へて居ります。儒教では政治学とは君主や政治家の修養の學問であり、謂はゆる心術の鍛錬が取りも直さず政治的修行であるのであります。政治とは共同生活の実を見事に挙げて行くための努力であります。支那では政治の基礎を仁の上に置いて居ります。孟子に『人皆人に忍びざる心あり、先王人に忍びざる心あり、斯に人に忍びざるの政あり』と申して居ります。政治とは人に忍びざる心、即ち仁心の具体化、換言すれば組織された仁であります。それ故に政治家は其の心構へを正しく、濃かに仁愛の心を精神に湛へて居なければなりません。荀子は『治人ありて治法なし』と申して居ります。それは制度よりも人間が大切だといふことであります。荀子は更に之を説明して『法は治の端なり、君子は法の原なり。故に君子あれば法省くと雖も、以て遍きに足る。君子なければ則ち法具はると雖も、先後の施を失ひ、事の変に應ずる能はず。法の義を知らずして法の数を正す者は、博しと雖も事に臨んで必ず乱る』と申して居ります。この思想は中庸に『其の人存すれば則ち其の政挙がり、其の人亡すれば則ち其の政息む』と言つて居るのと全く同一精神で、孟子は一層端的に『君子なくんば以て治まるなし』と申して居ります。文王武王の政治は、文王武王を待つて初めて行はれるので、たとへ文王武王の政策や制度が遺つてゐても、これに較ぶべき人物がその局に当らなければ、政治の実績は決して挙げぬといふのが支那の正統思想であります。それ故に『人道は政に敏に、地道は樹に敏なり、政なるものは蒲盧なり』と申して居ります。その意味は政治家の人格の善悪が直ちに政治に現はれて来る、それは土地の善悪が草木の上に現はれると同様である、政治は丁度發育の旺んなる植物、即ち蒲や盧(蘆)のやうなものであるといふのであります。随つて政治上で最も大切なことは、尚賢即ち賢者を尚ぶことであります。賢者とは優秀な指導者といふことで、立派な資格を具へた人が政治の局に当らねばならぬといふのであります。

これは欧羅巴の政治思想と著しき対照を示して居ります。西洋では人間がその中に居れば、自動的に立派な人間になり得るやうな社会を組織することに、非常なる力を注いで居ります。之を荀子風に申せば『治法ありて治人なし』といふ思想で、支那に於ける法家の思想と同一傾向であります。尤も儒者と雖も決して全然組織や制度を無視するものではありません。現に孟子は『徒善は以て政を為すに足らず、徒法は以て自ら行ふこと能はず』として、如何に主観的に民安かれと念じて、安民の実を挙げべき具体的政策を立てなければ本当の政治家でないと申して居ります。儒教は決して制度を無視するものではないけれども、ただ制度よりも人格を重んずるのであります。

東洋の諸民族は、日本もまた例外でないと存じますが、外面的制度や規則によつて自治的に行動することに慣れて居りませぬ。『君子なくんば以て治まるなし』といふことは、東洋に於ては拒みがたき真実であり、歴史が確実に裏書きして居ります。如何に多くの法律を作つても、統制の網の目を如何に細かにしても、君子が政治の局に当らなければ、政治の実績は挙げられないのであります。小人が政治の實際に当れば、法律や統制は唯だ悪を働く手段を与へることになり、民は塗炭の苦しみを嘗めねばなくなることは、いか程でも証拠を挙げる事が出来ます。

申すまでもなく今日の国家に於ける社会現象は、複雑多端を極めて居ります。この複雑多端なる現象に対して、能く全体的判断を下し得る者でなければ、本当の政治家たる資格はないと存じます。而してこの全体的または総合的判断の主たる要素を構成するものは、事務的判断でもなければ学術的判断でもなく、実に広義に於ける道義的判断であります。それは精神的鍛錬を経たる者のみが能くするところであります。かやうにして儒教は、ギリシアのプラトンと同じく、厳正に政治家に対して哲人の資欲を要求して居るのであります。これは必ず復活させねばならぬ東洋伝統の精神であります。

五

さて漢民族の性格が、此の民族が黄河流域に農耕生活を営んで居る間に築き上げられたと同じく、印度精神は広大なガンジス河の流域に農耕生活を営んで居る間に創られたものであります。印度アーリヤ人は中央亜細亜からスライマン山脈の嶮難を越えて先づインダス河上流に來り、その数々の支流に潤されたる沃野に、家畜を牧し農業を営みながら、次第に發展してその領土を東に進め、遂にガンジス河の流域に進出するに至つたのでありますが、其間に彼等の社会は次第に農耕的色彩を濃くし、遂に完全に農民化したのであります。而して恰かも殷や周時代の黄河流域に於ける支那人と同様に、彼等もまたガンジス河流域に幾多の都市国家を建設し、それ等の群小国家の間に激しき鬭争が行はれたのであります。これは印度の戦国時代と申すべく、且つ支那の戦国時代と同様に、大小の国家が互ひに覇を争ひ、その競争の間に燦然たる印度文化が出現し、印度の最も特殊な社会組織、即ちカースト制度が確立されたのもこの時代のこととて、これによつてバラモン至上主義が確立され、正統バラモン哲学が深遠なる思想を説いて居ります。例へば独逸のショーペンハウエルが此の時代に出来たカタ・ウパニシャツドを読んで、『全篇悉く神聖にして熱烈なる精神に充ち、どの章も読者をして深遠崇高なる思想を起さしめる』と感歎して居ります。しかも支那に於て孔孟思想に対して老荘思想が対立したやうに、やがてバラモン至上主義に対して反動が起り、仏教及びジャイナ教の如き新しき宗教が唱へられたのであります。仏典を読みますると、屢々十六大国といふことが出て來ますが、當時は其等の十六大国以外に無数の小国家があつたのであります。其等の大小の国家群の中、マカダ・コーサラの兩國が次第に四隣の国々を併せて強大となり、互ひに対立して相譲らなかつたのであります。勝利は遂にマカダ国に歸し、その基礎の上に支那の漢にも較ぶべき印度最初の統一帝國が、孔雀王朝によつて建設されたのであります。有名な阿育

王は、孔雀王朝第三代の君主であります。阿育王は最も熱心なる仏教信者で、『道法による征服 Dharma-vijaya』を標榜して国民の教化に全力を注ぎ、且つ国外に仏教の伝道者を派遣したことで有名であります。この王朝は今から約二千二百五十年前から二千百年まで約百五十年間印度に君臨しましたが、其後は再び印度の戦国時代となり、混沌たる分立割拠の状態に陥つたのであります。其間に印度は頻々として異民族の侵略を受けましたが、今から千六百年以前に、グプタ王朝が再び印度を統一し、約二百年に亘つて印度に君臨し、印度史上空前絶後の黄金時代を現出しました。国王はバラモン教の篤信者であつたので、一時仏教やジャイナ教に圧倒されたバラモン教が復興し、社会的にはカースト制度が強調されましたが、王室は仏教やジャイナ教に対しても極めて寛大であり、名高い無着・世親兄弟が出たのもこの時代であります。帝国の組織制度は孔雀王朝時代よりも一層完備し、教育は普及し、社会政策が見事に行はれ、死刑は廃止されました。この王朝の最盛時に印度に渡つた支那の僧侶法顕の書物の中に、王朝の善政下に平和な生活を営んで居た印度民衆の状態が美しく書き残されて居ります。生活の豊かなことが当然文化の発達を促し、学術・文学・芸術の花が燦爛と咲き匂つたのであります。印度が世界に誇り得る偉大なる詩人カーリダーサもこの時代の人であります。ベノイ・クマール・サルカル教授は『最もよく印度及び印度精神を体得した唯だ一人の人物を挙げよと言はれるならば、予はマヌ、ヤージュナヴルキヤ、仏陀、阿育王、サムドラグプタ、シャンカラ阿闍梨、シヴァージ、チャイタニヤの何れをもとらず、実にカーリダーサ其人を指名する』とさへ申して居ります。洵に彼のラギーザンサといふ英雄詩の中には、古今を通じて最も簡潔鮮明に印度精神の理想を言ひ現はした一節があります。

かやうに滾々不尽の生命と活力とを示した印度民族も、繚乱たるサンスクリット文明を満開させた後、またもや萎靡凋落の途を辿り、印度は例の如く四分五裂の状態に陥りました。其後今から千二百年前にベンガルに興つたハルシア王が、一時北印度を統一しましたが、王の死後には再び混沌乱離を極め、其後の五百五十年間、茫々たる印度の天

地、唯だ大小無数の国家が泡沫の如く興亡起伏するのを見たのであります。而して今から約四百年前、西方より侵入せる回教徒が印度を征服して、偉大なるムガル帝国を建設したのであります。此の帝国もその盛時は百年にすぎず、遂にイギリス人が印度の主人公となるに至つたのであります。

かやうにして印度四千年史の上に於て、全印度が一国家に統一されたことは、僅に前後三回にすぎず、しかも何れの王朝も本当に統一の実を挙げたのは百年乃至百五十年に止まり、其他は小国分立の時代であつたのであります。而して此等の三王朝の中、第一は仏教の信者、第二はバラモン教の信者、第三は回教の信者であり、印度の三大宗教が各々一度は代表的王朝によつて統一国家を樹てたのであります。

同じく農耕民族でありながら、支那人の性格は著しく現実的、倫理的であるのに対して、印度人は甚しく瞑想的・宗教的であります。これは支那と印度との地理的相違が、民族精神に与へた大なる結果と存じます。就中、氣候の相違、即ち支那は温帯に位し、印度は熱帯に位することが、最も大なる影響を及ぼしたことは言ふまでもありません。黄河上流地方は、蘭州盆地でも長安盆地でも、決してガンジス流域と較ぶべき沃野ではありません。氣候は夏も冬も共に酷しく、土地は多くの労働を加へて初めて穀物を産するのでありますから、農民生活は決して容易ではない。彼等は熱帯の民の如く、坐して天恵に浴し得べくもないのであります。彼等の筋骨は逞ましくならなければならず、怠惰安逸は許されず、窮乏に安んずる忍耐を学ばなければなりません。このことは支那民族をして世界に放ける最も實際的な民族に作り上げたのであります。

然るに印度の自然は極めて複雑であります。印度北境のヒマラヤ山脈は蜿蜒として東西一千五百哩に亘り、直ちに平地より起つて平均一万八千尺の高嶺となり、その一番高いエヴェレスト山は、実に二万九千尺の天涯に聳えて居ります。ヒマラヤ山の東南麓は、名高いテライの密林で、熱帯植物の巢窟となつて居り、それより四千尺登れば温帯植

物が繁茂し、一万二千尺にして寒帯となり、一万六千尺にして万古の雪が積つて居り、熱帯の豊富絢爛と寒帯の肅条索寞とが、収めて一望二万尺の中にあるのであります。ガンジス河の流域は、広袤約四十万方哩、土地の肥沃にして産物の豊富なることは世界無比と言はれて居ります。而してガンジス沃野の西に尽くるところ、アラビヤ山脈の南には、四百哩に亘る印度沙漠があります。ガンジス下流地方の雨量は世界第一と言はれるのに、ここは一滴の水もなき灼くが如き砂原であります。而してこの沙漠の海に尽くるところは、陸にもあらず沼にもあらず、瘴癘の氣不斷に立籠めて人間の住むに堪へざるクッチの湿地であります。洵に複雑にして且つ激しき対立をなして居ります。この地理的自然は、印度の一切の人事、随つて印度精神の上に鮮明深刻に反映して居ります。その上印度平野の暑い氣候には何人も打克つことが出来ませぬ。ここでは人間は早熟早老を免れませぬ。如何に慄悍なる民族でも、数代の間に柔弱となるのであります。自然は余りに豊かなるために人を怠惰にし、余りに激しいために天地に対して無力の感を抱かしめるのであります。

それ故に一つの帝国が新たに興り、その建設者が新鮮潑刺たる創業の努力によつて、心靈的にも実践的にも、実に驚くべき仕事を成し遂げるのであります。幾許もなくして现实生活に対する努力は減退し、創造の歡喜に対する氣力が薄弱となり、次第に衰頹の淵に沈み行くのであります。而して偉大なる印度精神は、僅かに寥々たる個人の魂の裏に、消えなんとする焰を護り続けられるに過ぎなくなるのであります。

さてショーペンハウエルをして『わが生前の安慰にして、また死後の慰藉なり』とまで讃嘆せしめられた前述のカタ・ウパニシャッドは、死神閻魔と篤信精進のナチケータスとの問答にかたどりて、生死解脱の祕密を説いたものであります。いま其の結構を略叙しますれば、ナチケータスの父が、彼を死神に与へたので、彼は死神の巨城に三夜を過ごした後、死神に向つて三つの願ひを述べました。第一願は生を得て再び父を見ること、第二願は上天の媒である

火の何ものなるかを知ること、第三願は死に関する疑ひを解くことであります。死神は前の二願を容易に聴きいれましたが、第三願には答へることを欲せず、他の願ひを以て之に代へよと申しました——『万代まで生存する子孫を選べ。畜類・象群・金銀・馬匹を選べ。地上の大厦を選べ。欲する限りの収穫を得んと望め。若し之に等しき他の願望あらば之を選べ。全世界に君臨せよ。予は如何なる願望をも満足せしめん。人界にて得難き何ものにも願へ。心の限りのものを選べ。珠玉の車に乗り、妙樂を奏する美姫は、人の希ひて得難しとする所なるも、予は之を与へん。されど死に就ては之を問ふこと勿れ』然るにナチケータスは言下に答へました——『此等のものは唯だ五根の力を損ずるのみ。諸行は無常なり、人命は過ぎ易し。汝自ら肥馬に跨り、歌舞を肆にせよ。吾は之を欲せず』死神は此の言葉に動かされて、遂に深奥の祕密を明かすのであります。

ナチケータスが、七珍万宝よりも、一切の此世の権力よりも、一層生死の問題を重んじたことは、印度人至深の要求を表象せるものであります。これこそは彼等の至極の関心事であり、随つて夙く既に吠陀時代に於て万有の背後に潜む一如を把握し、『我は梵なり *Aham Brahma asmi*』といふ金剛不壊の真理を証悟したのであります。正統印度の精神的要求は、実に此の真理を、現実の生活の上に実現することに在ります。百花繚乱たる印度の哲学・宗教は精緻なる論理と周到なる実修とによつて、如法に人間の理智と意志とを鍛錬し、一切の不完全を脱却して自我を完成し、かくして梵に帰一することを目的とせる点に於て、悉く其の嚮ふところを一にして居ります。即ち印度の教法は数ふるに遑なかるべき諸多の法門に分れて居りますが、総じて解脱を理想とせざるはないのであります。

此等の法門は『ダルシヤナ *Darsana*』と呼ばれて居ります。ダルシヤナはドリシユ即ち『見る』といふ語根から出たもので、まさしく人生觀・世界觀などといふ場合の『觀』に当ります。而して其の『觀』には、肉眼を以て觀るのと、知性の眼を以て觀るのと、精神の眼を以て觀るのと三つあります。印度哲学者は、認識の方法を概ね三種に分け

て居ります。一は現量、二は比量、三は聖言量であります。現量とは感官による知覚、比量とは論理的思惟による認識、聖言量とは聖者の体験を通しての真理把握即ち精神的直観であります。哲学・宗教のダルシヤナは、取りも直さず第三の精神的直観であり、存分に自我を鍛錬することによつて開かれる靈眼を以てしてのみ可能とされるのであります。此の精神的文化の一面に於て、印度が特異の地位を世界史上に占めて居ることは更めて申上げるまでもありません。さり乍ら之が決して印度精神の全体ではなく、また全体であり得る道理もありませぬ。富士の高根が裾野なくして雲表に聳えるものでないと同じく、精神の百花もまた地上を離れて空しく爛漫たるを得ないのであります。印度が精神的直観を重んじたことは、常に印度人を没理性的なるかに誤解する原因の一つとなつて居りますけれど、実は世界に於て最も早く論理学と認識論とが発達したのは印度であります。彼等はまた既に二千年の昔に於て、三十二の学問 Vidyā と六十四の技術 Kala とを学習して居ります。而して其の研究の範囲は、認識論・論理学・文法・言語学・天文学・数学・医学・薬学・建築学・造船学より、惹いて一切の社会科学・実践科学に及んで居ります。即ち政治・経済は言ふに及ばず、絵画より舞踏に至る一切の芸術、生活に必要な一切の事項、例へば馬の飼育法、象の調御法の如きに至るまで、みな一個の学問として、其の術語を有し、其の専門著述を有して居たのであります。シール教授の『古代印度の実証科学』や、サルカル教授の『精密科学に於ける印度の業績』等を読みますれば、古代印度の精神が、理性の方面に於ても極めて潑刺たる活動を遂げて居ることを知り得るのであります。またシュクラニーティやアルタシャーストラを読みますれば、当時の印度が異常なる実践的能力、滾々不尽の創造力を有して居たことをも知ることが出来ます。

シュクラニーティの編輯は後代のことでありますが、之に記されて居るニーティ即ち『原理』は、孔雀王朝時代の生活指導原理であります。いま其中から数節を引用します。

『王士族が褥の上にて死すは罪惡なり。病に犯され苦惱悲泣して死するは王士に非ず。古への道を学べる者は、是くの如きを肯んぜず。戦ひて死するに非ずば、死は讃むべからず、卑怯は最も卑むべき罪惡なり』

『戦場に敗れて満足なる五体を以て家に帰り、平然として家族と団欒するが如き王士は、正に死に値するものなり』

『戦場に斃れたる勇者の死を悲む勿れ。彼は聖潔せられ、一切の罪障を離れて天上に生るべし』

『長期に亘る苦行と懺悔とによつて聖者が到達せる至高の境地は、一命を戦場に捨つる戦士によりて直下に獲得せらる』

『死を怖れて戦場より逃亡する者は、命ありとも実は死せるなり。万人の罪、悉く彼の上に負はせらる』

『勇敢に戦ひて戦場に斃るる君主は、必ず天上に生るべし。其君のために戦場に魁し、恐るることを知らざる者は、また永遠の幸福を得べし』

『王士族が無力となり、人民若し下等の者に压制せらるる時は、バラモン族即ち起つて戦ひ、彼等を討滅すべし』

それ等の章句は、まさしく印度の武士道を表現せるもので、旺盛なる尚武的精神が漲つて居ります。往々にして印度は昔から軟弱優柔の民なりしかに誤解されて居りますが、民族的生命が新鮮潑刺であつた時代は、是くの如き氣力を有つて居たのであります。この旺盛なる氣力によつて、孔雀王朝やグプタ王朝の偉大なる帝国が建設されたのであります。此等の王朝の盛時に於て、印度の帝王は実に偉大なる実行者でありました。偉大なる実行者なるが故に、その思想信仰に於て、決して偏狭なる排他的態度に出なかつたのであります。而王朝の帝王は、道法 Dharma を尊んだけれど、その特殊の現はれなる宗門の一つを偏愛することなかつたのであります。例へば阿育王は日々三宝に帰命頂礼せる仏教の篤信者でありながら、決して他教を迫害することなく、またギクラーマードイトヤ王は熱心なるバラモン教徒でありながら、仏教やジャイナ教に対して公平且つ寛大なる庇護を加へて居ります。かやうな生命と活力とを

示した印度精神が、グプタ王朝時代に繚乱たるサンスクリット文明を満開させた後、漸く萎微凋衰の域に入り、先づ回教徒に征服され、遂には英国の奴隸となり果てたことは、まことに是非もない次第であります。

六

さて近世に於ける欧羅巴の亜細亜進出によつて東洋諸国の大半は彼等の奴隸となつたのであります。そのために東洋の文化は蹂躪され、東洋精神は古代の新鮮と健全とを失ふに至つたのであります。此事のために東洋精神そのものを否定し去ることは許されないのであります。東洋伝統の精神は、その本質に於て極めて高貴なるものを有して居ります。亜細亜復興は単に欧羅巴よりの政治的独立を意味するものでなく、同時に東亞諸民族の精神生活に古代の光榮を復活させることであり、日本は実にこの莊嚴なる使命のために戦つて居るのであります。この戦ひの間に生れ出づべき新東洋精神は、一つの偉大なる統一精神でなければならぬのであります。統一は確乎たる中心があつて初めて可能であります。而して其の中心たるべきものは取りも直さず日本精神であります。

日本精神の数ある特徴の中、その最も著しきものは綜合の精神、統一の精神、包容の精神であります。己れを失はずして他を採り入れ、古きを失はずして新しきを採り入れ、すべての思想文化を具體的な日本国民の生活の上に、それぞれの意義と価値とを發揮させて来た日本精神は、東洋の綜合的精神の生きた姿であります。この精神によつて日本はすべて東洋の善きもの、貴きものを撰取し、その本国に於ては單に偉大なる過去の影となり果てたものでも、日本に於ては現に潑刺たる生命をもつて躍動して居るのであります。

日本精神が東洋的であるといふのは、儒教や仏教を採り入れたといふ意味ではなく、それ自体が最も東洋的であるのであります。その上に印度及び支那の文化や思想を採り入れたのでこの意味でもまた東洋的であるのであります。

即ち日本精神の統一性が、東洋の偉大なる二つの中心である印度及び支那の文化を自己の生命に攝取せることによつて、東洋の中の最も東洋的なものとなつて居るのであります。岡倉先生は自己の生命の内部に東洋の最も潑刺たる本質を発見し且つ把握したので、亜細亜は一つと唱へたのであります。

また日本はその保守的な点に於ても東洋的特徴を持つて居ります。併しながら日本は決して古き一切を愛著するものではない。万代不易といふことは、日本に於ては決して一切が永久に不易であるといふ意味には考へられない。それは信仰・道德・制度・風習、一言で申せば人間の文化現象に於て、一時的なるものと永遠的なものを分別し、その永遠的なものを飽くまでも守つて行くことに努めるのであります。これを日本の政治史に見ましても、日本は天皇を大御親と仰ぎ奉る民族制度の国家から、大化改新によつて有機的な君主国家となり、次いで実質的には貴族政治の国家となり、更に武家政治の封建国家となり、最後には明治維新によつて近代の立憲君主国家となつた径路に於て、亜細亜的といふよりもむしろ歐羅巴的進化の跡を示して居りますが、斯の如き変遷推移を一貫して、国民生活の中心が常に千秋万古易ることなき皇室に存した点に於て、実に最も際立つて東洋的であります。それ故にこそ日本精神は、旧を失はずして新を採り入れることが可能であるのであります。

これを全体から見れば、支那の倫理と印度の宗教が合流して、単一の東洋を成して居り、その一如を實現して居るのが日本であります。支那は飽くまでも世間的にして印度は出世間的、一は飽くまでも実践的にして他は形而上的、一は飽くまでも現実的で他は超越的であります。この東洋精神の両極が、実に日本精神に於て一つとなつて居るのであります。それは一面常に高遠なる理想を仰ぎつつ、しかも断じて現実を忘れざる心であります。最も嚴肅に現実の生活にいそしみながら、しかも常に理想を慕ふ心であります。現象即實在といひ、理想即現実といひ、或は娑婆即寂光土といふことは、東洋精神の特徴でありますが、この深奥なる真理を、単なる形而上学的議論としてではなく、日

常實際の生活の上に実現して行くところに、日本民族の偉大があります。是くの如き精神の見事なる代表者の一人として吾々は織田信長を挙げることが出来ます。信長が日頃愛唱して措かなかつたのは『敦盛』の舞の曲の『人生五十年、化転の内を比ぶれば、夢幻の如くなり、一度生を受け、滅せぬ者のあるべきか』といふ一句であり、彼が生涯の運命を決すべき桶狭間の合戦に出陣する間際にも、彼は起つて『敦盛』を舞ひ、高らかにこれを謡つたことは、世に名高い語草であります。信長は人生僅か五十年と覚悟を決めて居たのであります。宇宙の悠久無限に比ぶれば、人生の如何に儚なきかを身にしみて感じて居たのであります。若しこれが印度人が支那人であつたならば、それほど深刻に諸行無常と悟れば、出家隠遁して世間を離れるのが常であります。而して宗教的生活か或は風流の生活に身を委ねるのであります。然るに信長は、人生五十年と観じ、生者必滅と悟り切りながら、人身を受けて此世に生きて居る限りは、嚴肅に人生を律する法則を守つて、善戦健闘倦み疲れるを知らなかつたのであります。これは独り信長のみのことでなく、典型的日本人に等しく見るところであります。例へば明治維新の元勳の一人横井小楠は『功利に流れず禅に流れず、大丈夫の心聖賢を希ふ』と謳つて居りますが、それは功利即ち淺薄なる実利主義に囚はれず禅即ち抽象的理想にも溺れざることを以て理想として居るのであります。

是くの如き日本人の超越観は仏教によつて養はれ、現実観は儒教によつて鍛はれるところ多かつたのでありますがこの理想と現実とを相即せしむる素地は、既に日本の固有精神、即ち儒仏以前の日本精神そのものに明かに具はつて居たのであります。吾々の先祖は、世界を高天原、中津国、根の国の三つに分けて居ります。高天原は理想の世界、中津国は現実の世界、根の国は質料の世界であります。中津国即ち現実の世界は、高天原即ち理想によつて、根の国即ち質料を統制して行くことによつて、不斷の発展を遂げて行くのであります。而して中津国の君主及び人民が、高天原から降臨したといふ信念は、理想と現実とが密接不離の關係あることを体得したから生じたものであります。そ

れなればこそ日本精神は東洋精神の両極を綜合して、その魂を愈々深刻偉大ならしむることが出来たのであります。

さて支那及び印度以外の東亜濕潤地帯の諸民族は、多かれ少かれそのいづれかの、またはその双方の文化の影響・刺戟の下に発展の途を辿つて来たのであります。しかるにこの東洋の複雑多様の奥にひそむ一如が、既に千年にわたる生活体験によつて日本精神として鍊成されて来たのであります。日本はやくから日本に支那・印度を併せて三国と呼び、日常の生活をこの三国意識の上に営んで来たのであります。したがつて日本精神は即ち三国精神であり、この精神こそ、大東亞秩序の基礎たるべき新東洋精神の根柢または中心たるべきものであると信じます。

曾てディツキンソンといふイギリスの学者は『日本の文明は既に過去のものとなつた。日本は列強によつて西洋化されるのを避けるために日本自ら西洋化した。日本は日本を救ふ其の固有の文明を抛棄した』と慨嘆して居ります。

またアリス・シャレックといふオーストリアの婦人記者は、大正末期の日本を見て『羅列の国日本 Japan, das Land des Neben-Einander』といふ書物を書いて居ります。またヴィツテといふベルリン大学の教授は『二つの文化に挟

まれたる日本 Japan zwischen zwei Kulturen』といふ本を書いて居ります。成ほど、鉄筋コンクリートの建物と同時茅葺の屋根の家があり、靴と共に下駄があり、洋服と共に羽織袴があり、打見たるところ混沌として居ります。それは日本人が一面に於て寛大な國際的性質を持つて居ると同時に、他面に於て頑固な國民的趣味を有し、新しいものを自分の生活様式の中に採り入れながらも、決して固有の自分のものを捨てようとしなからであります。随つて表面は羅列でありますが、その奥底にはやがてこれ等のすべてを自己の生活の適當なる部面に於てそれぞれ所を得させ渾然として自分のものにしてしまふ和の精神が働いて居るのであります。吾々は明治維新このかた、最も熱心に西洋文明の摂取に努めて来たので、三国精神は今や世界精神となりつつあるのであります。

日本精神の此の包擁性は、日本民族が新鮮にして強靱なる生命を有つて居るからであります。日本の將兵が戦場に

於て壯烈鬼神を泣かしむる勇武を發揮して居るのは、民族の原始的新鮮さを今なほ豊かに保有してゐる何よりの証拠であります。唯だこの豊富強靱なる精神は、潜在意識として国民の胸底深くひそんで居り、一旦緩急あれば忠勇義烈の行動として万朶の花と開くけれども、未だそれが意識の客観性を通して思想体系にまで組織されて居らないのであります。世上に唱へられてゐる日本主義なるものは、日本精神の一面を詠歎的に讚美して居るだけで、日本人自身をさえ納得さへ得ないのみならず、その或ものは甚しく排他的または排外的で、自分の思想に同意せぬものに対しては聞くに堪へぬ言葉を以て攻撃を加へるといふ有様であり、本来の日本精神と相距ること最も遠い、偏狭至極のものでありますから、これを以て大東亞圈の思想指導原理たらしめる如きは思ひもよらぬ話であります。

新東洋精神は、伝統的東洋精神そのままであり得ずまた今日説かれて居る如き日本精神そのままでもあり得ない。それは日本精神を中心とし、伝統的東洋の否定的方面、例へば支那の尚古主義や印度の寂靜主義を揚棄しながら、現在の世界政治の段階に於ける東亞諸民族に、彼等の当面せる政治的運命を鮮明に自覺させて、その復興のための努力に駆り立てる力を有てるものとして創造されねばならぬのであります。

是くの如き思想は、冷やかなる理智によつて論理的に構成されるよりは、むしろ燃える情意によつて直観的に把握されるのが常であります。随つて新東洋精神は、完成した形を具へた一箇の思想体系として学者の書齋から世上に発表される性質のものではなく、強烈なる行動精神から生るべきものであります。即ち東洋再生のために身も魂も打込む復興亞細亞の行者の精神に孕まれ、その行動と共に成長して行くべきものであります。それは行動の間に成長して行く思想でありますから、必然鮮明にして且つ現実的な政治性を帯び、大東亞圈の政治的發展に役立つものでなければなりません。それは同時に東洋の再生を妨げる腐敗せる伝統を打破して、社会的革新の遂行に役立つ社会性をも帯びたものでなければなりません。是くありてこそ東亞諸国の民衆は、自らの内部よりの要求として新東洋精神に共

鳴するのに至るであります。私は斯の如き新東洋精神が、既に復興亜細亜を生命とする真摯熱烈なる青年の魂に胎動して居る事実を見、その健全にして偉大なる発達を祈つて止まざるものであります。

〔附〕

アジア及びアジア人の道

これから、私の考へてゐたことを出来る丈簡単に申上げること致します。一体、生きてをるといふことは、働くといふことです。もつと言葉を強めて申せば働くといふことは闘ふことでもあります。であるから、生きるといふことは闘ふことでもあります。万物は皆さうであつて、常に闘つてをるのであります。シュタインメッツといふオランダの学者がをりますが、『戦争哲学』といふ本を書いてをります。この本の中で、『人類は紅の血潮の盪の中で育つて来た』と申してをりますが、これは物凄いい言葉でありますが、拒むべからざる事実と存じます。遠く遡れば、ホームーの昔から、平和論の絶間がないに拘らず、世界史は戦争の記録であるといはれる程、人類が戦ひ続けて今日に至つたのであります。支那人の如きは世界に殆ど比類を見ない平和を愛する民族でありますが、その支那人でさへも、『国』といふ字を創る場合には、戈即ち武器、口即ち人民、一即ち土地これらの三つを組合せてをるのであります。さうして支那の歴史も亦他国のそれと同じく、戦争を以て終始してをります。将来はいざ知らず、古今東西の国々は今日に至るまで悉く戦争によつて起り、戦争によつて亡んでをります。

さうしてこの数限りない戦争の中で、規模が最も雄大で、意味が最も深甚であるのは、世界史における二つの最大

の対抗個体であるところのアジアとヨーロッパ、または東洋と西洋の戦争であると存じます。世界の戦争史は不思議なる秩序と統一とを以て終結してをります。人類の歴史的記録の中で、半ば空想的ではありませんが、最もはつきりと最初に思浮べられたのは、西洋においてはトロイの戦争であります。このトロイの戦争は、アジアとヨーロッパ、東洋と西洋との最初の戦ひであります。ギリシャの最初の歴史家ヘロドトウスは、トロイ戦争をかやうなものと考へて、その歴史をこの戦争から書き始めてをります。また人間が神話時代を去つて行く後の初めての純粋なる人間の歌とも申すべきホーマーのイリヤッドは、同じくこのトロイの戦を謳つてをります。これは決して偶然のことではなく、東洋と西洋との対立、抗争、統一が取も直さず世界史であり、トロイ戦争こそは実に斯の如き世界史の序幕であつたのであります。

その後この戦ひの舞台は、年代を経ると共に広く且つ大きくなり、そして現に今日においてその戦場は全地球になつてしまつたのであります。トロイの戦争は小亜細亜の一角にあるスカマンデルの荒野でありましたが、今日の大東亜戦争は渺茫たる太平洋並に遼大なる東亜全域を舞台としてをります。舞台に広狭はありますが、東西の対立抗争、統一のための戦ひであるといふ点において、両者はその本質を同じくしてをるものと存じます。茲にアジアとヨーロッパ、若くは東洋と西洋といふ一划の概念は、東洋並に西洋に住むところの民族群の生活様式、文化形態、及びその根底をなすところの世界観の対立を現はすものとして用ひられてをります。

世界史の年代に従つて西洋または東洋といふ言葉の内容が量的にも空間的にも大なる変遷を遂げてをります。この変遷の跡を辿ることは甚だ魅力ある問題で、その変化の跡を明らかにすることは取も直さず世界史の本質を掴む所以でもあります。従つて非常に重大なる研究題目でもあります。今日にかやうな問題に立入る時間は無無論ありません。唯吾は東洋的、若くはアジア的といふ言葉は如何なる内容を持つてをるかといふことに就て考へて見たいと思ひます。

こゝに一言申上げて置かなければならぬことは、近来、日本の学者の中に、東洋またはアジアといふ言葉は地理学上の名称であつて、何等精神的内容、若しは文化的内容を持つてをらぬといふ主張が相当に勢力を得てをるのであります。言葉を換へて申せば、地理学的名称以外に東洋または東洋文化といふものはないといふ主張であります。この主張の最も有力なる支持者若くは主張者は津田左右吉博士であり、谷川、清水、羽仁、佐野の諸君も亦この意見に賛成の意を表してをられます。これらの人々の意見によりますと、東洋には西洋史と意味を同じくした歴史はない。西洋においては一つの文化が展開され、従つて一つの西洋史が形成されてをるけれども、東洋においては左様なことがない。東洋には西洋史と同じ意味の東洋史はないばかりでなく、あるものは唯東洋諸民族の個々の生活の歴史であるところの日本史、支那史若くは印度史等々があるだけであると申すのであります。さうして『アジアは一つである』という岡倉天心の言葉の如きは、これを以て単純素朴の思想と斥けられてをるのであります。即ち彼等は、アジアの生活式も多様であり、文化形体も多様である。産業様相も多様である、アジアは一つではないどころか、余りに多過ぎるやうに申してをるのであります。

しかしながらアジアの統一、若くはアジアの一如を唱へる如何なる人も、未だ曾て表面に現れたる複雑多様を拒んだ者は一人もないのであります。表面のアジアは政治、経済、産業、文化のそれらの部門において甚しく差異あることは、何人もこの眼で見、この耳で聴き得る事実でありますから、拒まうとしても拒めるものでなく、また拒む必要もないのであります。唯表面の複雑多様の中に潜むところのアジア的なものがあるか、ないかを探ねる時に、初めてこゝにその議論が生ずるのであります。でありますから殊更にアジアの複雑多様を誇張するといふ心理が実は不可解なのであります。左様なことは言はなくても判つてをるのであります。またアジアの複雑多様を指摘するだけで、その奥に何ものが潜んでをらぬかといふ探求をせず、その奥に潜むところの或るものを掴まうと努力せざる態

度こそ、寧ろ単純素朴といふべきものではないかと存じます。若し単に差別のみに目を着けるならば、ヨーロッパにおいても同様であります。西洋においても、例へばロシア的なものとイギリス的なもの、ドイツ的なものとフランス的なものとの間には差別若くは特殊の姿のみ多くして殆ど共通なものを擲むことは出来ないのであります。それにも拘らずヨーロッパの国々は、ギリシャの思想と、ローマの法律と、基督教の信仰とをそれとく多少の程度においてその精神に入れてをりますから、これをヨーロッパ的と称することが出来るのであります。さうして現実において、ヨーロッパの中世時代には斯の如きヨーロッパが存在してをつたといひ得るのであります。

しかしながら近代に入つてから、全ヨーロッパの最も力強い絆となつたところのローマ法王の勢力が宗教改革によつて覆へされるに至つて、このヨーロッパ的統一は先づその根底において揺ぎ始めてをります。總て基督教の信仰そのものが衰へるに至つて、ヨーロッパ的統一の根底はこゝに崩壊過程に入るのであります。

爾来ヨーロッパの国々は共通の根底即ち最も力強い共通の絆であつた基督教の信仰を失つて、各国とも各自の国民性の強調に努めて来たのでありますから、今日のヨーロッパを見ますと、共通のヨーロッパはなくして、あるものは唯、個々の民族国家のみであるといひ得るのであります。

かやうな次第でありまして、差別のみに目を着ければヨーロッパにも統一はない。アジアにも亦同様であります。その表面の差別の奥に、明かに西洋若くは東洋として対立するところのものが横はつてをるのであります。これを東洋方面において見ますれば、少くとも支那の唐の時代に立派にアジア文化、若くは東洋文化の成立が出来上つてをります。この唐の文化といふのはアジアの二大中心であるところの支那と印度の思想文化の交流によつて出来上つたものであります。唐のあとには宋が起りました、こゝに程朱の學問が起つたのであります。程朱の學問は恰も中世におけるローマンカトリック教と同じく、印度を除く全東亞民族の思想指導原理であつたのであります。程朱の學と申

すのは印度精神の精華ともいふべき華嚴及び禪の思想に、支那本来の伝統的精神である孔子、並に老子の教説、即ち当時東亜に於ける最も有力なる思想が、宋の学者の魂を坩堝として出来上つた謂はゞ東亜精神の綜合であり、この思想が中世歐羅巴における基督教と同じく、印度を除く全東亜の精神界に君臨したのであります。我が日本でも鎌倉時代以後、この宋学を以て思想指導の原理としてをつたのであります。日本が宋学の思想から脱却し始めたのは、徳川時代の中期、伊藤仁斎、荻生徂徠が、厚始儒教に還れといふ叫びを挙げた頃からであります。

かやうな次第でありまして、アジアの思想的統一は、現実の事実として存在して居るのであります。今日のアジア諸国は分裂状態にありますけれども、その奥底にアジア的な力、若くは生命、若くは理想が潜んでをることは、拒むべからざる事実なのであります。

ついでに申上げて置きたいことは、大東亜圏といふことであります。吾々は、大東亜圏といふのは、今日吾々日本人が初めて唱へ出した理想であつて、いま最初の実現の過程にあるものと考へてをります。しかしながらこれは決して吾々がいま唱へて、將に実現されんとするものでなくして、東洋の歴史において既に実現されて居つた事実なのであります。即ち先程申した大唐帝国、この大唐帝国は明かに大東亜秩序を建設したものであります。先づその版土から申しまして、唐の政治圏即ち唐の勢力の及ぶ所は、西はパミールを越えてトルキスタンに及んでをります。南はビルマ、タイから今日の仏印全部をその支配下に置いてをります。北は内外蒙古を越えてバイカル湖畔に武威を及ぼしてをります。東は南滿洲を経て、沿海洲の涯にまでその力を及ぼし、更に南下して朝鮮半島の北半をもその勢力圈内に収めてをります。是の如くして今日日本がその指導下に置くところの所謂大東亜圏よりも一層広い地域が、唐の支配の下に一個の共同体を、よかれ悪しかれ作つてをつたのであります。これは疑ひもなく一種の東亜共栄圏でありまして、印度を除く東亜の全域は、我が日本を唯一つの例外として、悉く支那の政治的支配の下に立つて居り、文化

的若くは経済的には、我が日本さへもその唐の影響下にあつたのであります。

大唐帝国が如何にしてかやうな偉大なる事業を成し得たか。これは一層高い理想の下に、また一層雄大なる規模において新しい大東亜秩序を築かんとする日本にとつて他山の石とするに足ると思ふのであります。私の考では、唐がかやうに偉大なる勢力圏を築き上げることが出来た第一の原因は、異民族に対して甚だ寛大であつたことであります。御承知の如く、漢民族はアングロサクソン民族と相並んで、世界の有ゆる民族の中で最も自尊心の強い民族であります。自分だけが文化を持つてを、漢民族以外のものは文化を有せざる蛮民と心得てをる程、民族的自尊心の強い民族であります。殊に唐の如きは、あれ程大なる地域に君臨したのでありますから左様な自尊心が一層強くあるべき筈であります。事實はさうでなかつた。支那の歴代の中、唐帝国は異民族に対して最も寛大な態度をとり、野郎自大の風が最も少かつたのであります。

これは何故かと申しますと、御承知の如く支那は歴史の始りから北方の異民族と戦ひながら発展して来たものであります。さうしてこの北方の異民族は、長年の間漢民族を苦しめ、漢民族と戦つたのであります。文化的には次第次第に漢民族のために同化されて行きました。殊に北支一帯の地方においては、其処に移り住んだ異民族は次第に漢民族化されてしまひ、其数も非常に多くなつたのであります。漢代の末になりますと、黄河以北一帯の地は漢蕃雜居の地といはれるやうになつたわけでありす。さうして遂には此等の異民族が漢民族の衰微に乗じて、北支を支配すること略々三百年に及び、漢民族の支配者は、これらの異民族のために南方に追ひやられたのであります。但し此等の異民族は、政治的優先の地位を占めて漢民族に君臨しましたけれども、いづれも漢文化の崇拜者であつたので、いつの間にか彼等に同化されて行つたのであります。乍併此等の異民族、普通之を五大別して五胡と呼ばれて居る此等の北方民族は、純粹の漢民族の如く支那伝統の思想や文化に対して過度の執著を持つてゐなかつた。彼等は漢文

明を尊敬はしますけれども、漢文明以外のものでもいい、と思ふものは自由に之を採用したのであります。恰度これらの異民族が北支に君臨してをる間に、御承知の如く漢代から西方との交通が開けたので、その道を通つて西域並に印度の文明思想が次第に支那に流入し、就中仏教が大なる勢を以て胡族支配下の支那に入つたのでありますが、これらの胡族は新しい文化に対して漢民族の如く排他的でなかつたのであります。でありますから、支那のいはゆる南北朝対立の時代において、北朝文化は次第に國際的性質を帯びて來た。即ち漢文明以外に印度の思想・文化を加へた國際的色彩を帯びて來たのでありますが、この南北対立が隋によつて統一され、更に隋の統一の後を承けてこれを大成したのが唐であります。

唐朝の建設者は御承知の如く北支の人でありまして、漢蕃雜居の地から出てをります。のみならず伝説によれば唐の先祖は本当の漢民族ではなくして、北方の胡族であつたともいはれてをります。即ち國際的色彩を帯んだ北支那に生れ、その文化の後を承けたのでありますから唐の文化が國際的色彩を帯びるのは當然であります。のみならず唐朝は、支那の歴代においては全く例外といふ程尚武の時代であつたのであります。支那は武を卑しめる国であつて、諺に『好人は兵に当らず、好鉄は釘に打たず』と言つてをります。立派な人は軍人にならない、立派な鉄は釘に打たない、これ程武を卑しむ国でありますが、唐代だけはこの例外で軍人が新興の特權階級として國家の最上の地位を占めてをりました。今日名を残してゐる文人、學者の如きも當時は名もない軍人の下に逼息してをつた人々であります。彼等は文人と違つて自國の學問に対する大なる執著を感じない。これらの人々は思ふが儘に全アジアに拡がつた自分の領域内の新たな文化を取入れた。西方は固よりペルシャの文化も思想も、印度の思想も文化も、何等躊躇することなく、好むが儘にこれを取入れて、こゝに北朝時代よりも一層濃厚な國際文化が出來上り、それが國際的であつたために東亞諸國の國民は容易にこの唐の文化を受入れることが出來たのであります。當時の唐の都の長安は恰も西方にお

けるアレキサンドリヤやバグダッドと同じく、全く一個の國際都市であつたのであります。此處には西洋の人々も西亜細亜の人々も自由に出入してをつたのであります。料理屋に入ればトルキスタンで出来た葡萄酒をシリヤから産した夜光の盃で飲み、料理屋に上れば胡女が胡樂を奏してをります。仏教も、基督教も、ベルシャのゾロアストル教も、マホメット教も、それ／＼長安の都において布教することを許されて居り、支那伝統の思想たる儒教そのものは、前の漢の時代、若くは後の宋代、明代、清代に較べると甚だ寂寞であつたのであります。さうして外国思想の中ではとりわけ仏教が非常な勢を以て栄えた。仏教は当時支那に行はれてをつた老莊と民間信仰と相結んで出来た道教の極めて卑俗な信仰にも満足せず、竹林七賢によつて代表せらるる虚無思想や、形式的な儒教にも満足せず、曹操を代表者とするやうな淺薄な功利主義にも満足せざる民心に向つて、その莊嚴なる儀禮と、大乘化されたる理論を以て最も大なる満足を与へたからだと思ひます。

かやうな次第で、唐代は異民族と多く接觸してをつた關係上、これらの民族に対して寛大であり、竝にその創り上げた文化が國際的色彩を帯びてをつた。國際的というのが悪いならば全アジア的色彩を帯びてをつた。恐らくこの二つが唐をしてあの大業を成さしめた所以であります。これは今日吾々が大いに参考とすべきことと思ひます。若し日本人が昔の支那人の如く、吾々だけが本当の人間であつて、他の人間は皆な夷狄であるといふ、さういふ高慢な態度を以て異民族に接するならば、左様な独りよがりの國民には決して心服して来ません。また日本本来の思想以外は皆悪い、いいものは惟神の道だけで、仏教も儒教も皆つまらぬといふ態度を以て大東亞に臨むならば、千年、二千年の後はいざ知らず、現在の大東亞戦争に於ては、左様な思想戦は無力であります。少くとも現在並に近い将来において左様な偏狭な精神の所有者には、アジアの諸民族はついて来ないのであります。この点、唐のやり遂げたあとを見て吾々は深く反省して参考にしなければならぬと思ひます。

かやうな次第で、大東亜圏は将来の理想ではなくして既に過去の歴史として実現されたことがあるのであります。

恰も中世のヨーロッパが、ローマ法王とローマ皇帝、この精神的代表者と政治的代表者によつて統一されたことがある如く少くとも印度を除くアジアは一つの統一体を形成したことがあるのであります。でありますからアジアの存在を否定するといふことはこの点から見ても間違ひなのであります。のみならず、吾々日本人がアジアを否定するといふことは、自分のうちに潜むところの最も本質的なものを認識せざる自己否定論と申さねばなりません。

何故ならば、吾々の精神、即ち日本精神は、取も直さず支那の思想文化、印度の思想文化を受入れることによつて今日あるを得たからであります。支那の思想の最も純なるもの、印度の思想の最も優れたもの、即ち儒教と仏教を取入れ、その思想を根底とした文化から、善きものを取り悪いものを捨て、それを吾々の魂の中に堅確に把握したればこそ、今日の吾々の精神が出来上つてをるのであります。よかれ悪しかれ、吾々の精神がこのアジアの二大文化の中心から流れ出た思想によつてはぐくまれて来たことは事実であります。でありますから、これを否定するといふことは自分自身を否定することでもあります。アジアの最も善きもの、最も尊きものは吾々の魂の中において実現され、さうして現に吾々の精神として動いてをるのであります。これは動かすべくもなき事実であつて、アジアは先づ最も確実なる事実として、吾々の精神において統一されてをるのであります。従ひまして、大東亜圏と申すのは、吾々が魂において実現してをるところのものを客観的に実現すること、吾々の精神をアジアの地域に一つの政治機構、経済機構として具体化することであります。それが取も直さず大東亜秩序建設であると思ふのであります。

かう考へて来ますと、『アジア及アジア人の道』といふことは取も直さず『日本人及日本の道』であります。吾々が吾々の中に持つてをるところのものを最も見事に鍛へ上げて、さうしてこれを客観化して行くこと、具体化して行くことが大東亜建設の大業であるのであります。でありますから吾々は吾々の中にあるものを実際の事実として大東亜

に実現するために努力して行かなければならぬのであります。この努力を離れたる思想若くは理論は決して思想若くは理論の名に値しないのであります。それは単なる知識であります。思想若くは理論は、必ず実現即ち実践の努力を伴はなければならず、また実践の努力の中に一步々完成されて行くべきものであります。

今日、日本は西洋の主知思想の感化を受けて、理論々と叫ぶ声が非常に高いのであります。東亜の指導理論はどうとか、アジアの指導原理はどうとか、これを求むる声が非常に高いのであります。けれども若しこの理論なるものが、学者の書齋の中で完成された形において世の中に売出されるものと考へるならば、それは誤であります。吾々の指導原理は、雨にも降られず、風にも当らざる温室の中で咲かせた花であつてはならないのであります。左様な理論は如何に美しからうとも、風雨に当ればひとたまりもなく倒れるのであります。共產主義が一時日本の青年に対して大なる魅力をもつたことがあつた。共產主義は理論としては決して正しい理論ではありません。しかしながらこれが非常に魅力をもつたといふのは、これに実践が伴つたからであります。考へてをることを事実に見はさずばやまずとするとこの実践が伴つたからであります。単なる理論から申せば、共産党が盛な頃から反共産的な理論が沢山世の中に生まれて、それらの議論として共產主義より遙かに立派なものが少なくなつたのであります。しかしながらそれらの反共産理論は何等それによつて青年の実践的欲求をそゝるだけの力を持つてをらなかつたために、遂に無力であつたのであります。でありますから、共產主義は本来理論としては不完全であるために、一旦党の力がなくなつてその実践運動が不可能になると同時に、見る影もなくその思想も崩壊してしまふ、かういふのが現状であります。

この例を見ても解るやうに吾々が求むるところの『アジア及アジア人の道』は抽象的の道であつてはなりません。吾々をして大東亜圏を建設せざるやまざらしむるだけの実践的指導力をもつものでなければならぬ。これはお互が大東亜秩序建設のために身命を捧げて努力して行く間に次第に完成されて行くべきものであります。

吾々の努力が進めば、それに伝つて理論も次第に完成されて行く。これが吾々の求むる理論であり、吾々の求むる道であります。従て『アジア及アジア人の道』も、私が壇上から如何に見事に論理的にこれを説明しても、畢竟無益の仕事でありまして、吾々が実践によつてこの道を実現して行くといふことが肝要なのであります。尤も、アジア及アジア人のいろ／＼な特質を検討し、東洋的なものは如何なる特徴をもつてをるかといふことは、一応は吾々がはつきりして置かなければならぬことであります。吾々は如何なる点において西洋的と違つてをるかといふことは、吾々の理性によつて判断して、一応ははつきりと認識して置く必要があります。しかしこれは私が他の場合において幾度かお話したことがありますから、今日ここに繰返すことを欲しません。今日は只今申上げた通り、吾々の実践によつて『アジア及アジア人の道』を完うして行く覚悟をきめなければならぬ、これだけを申上げて置きたいと思ひます。